

二宮尊徳

曉紅生

264  
468

094839-000-0

特13-128

二宮尊徳

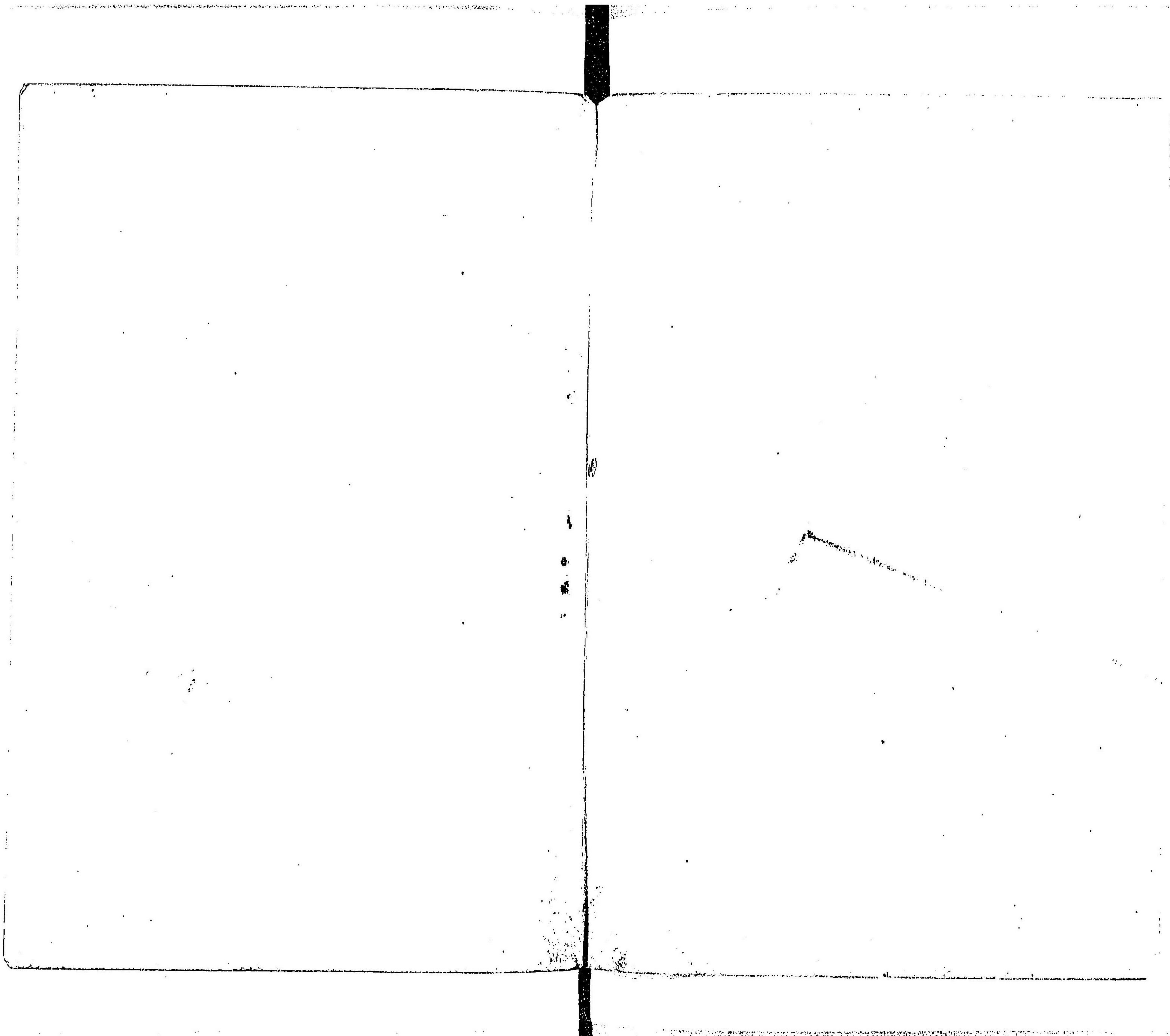
森 曉紅/著

M43

DBQ-2420

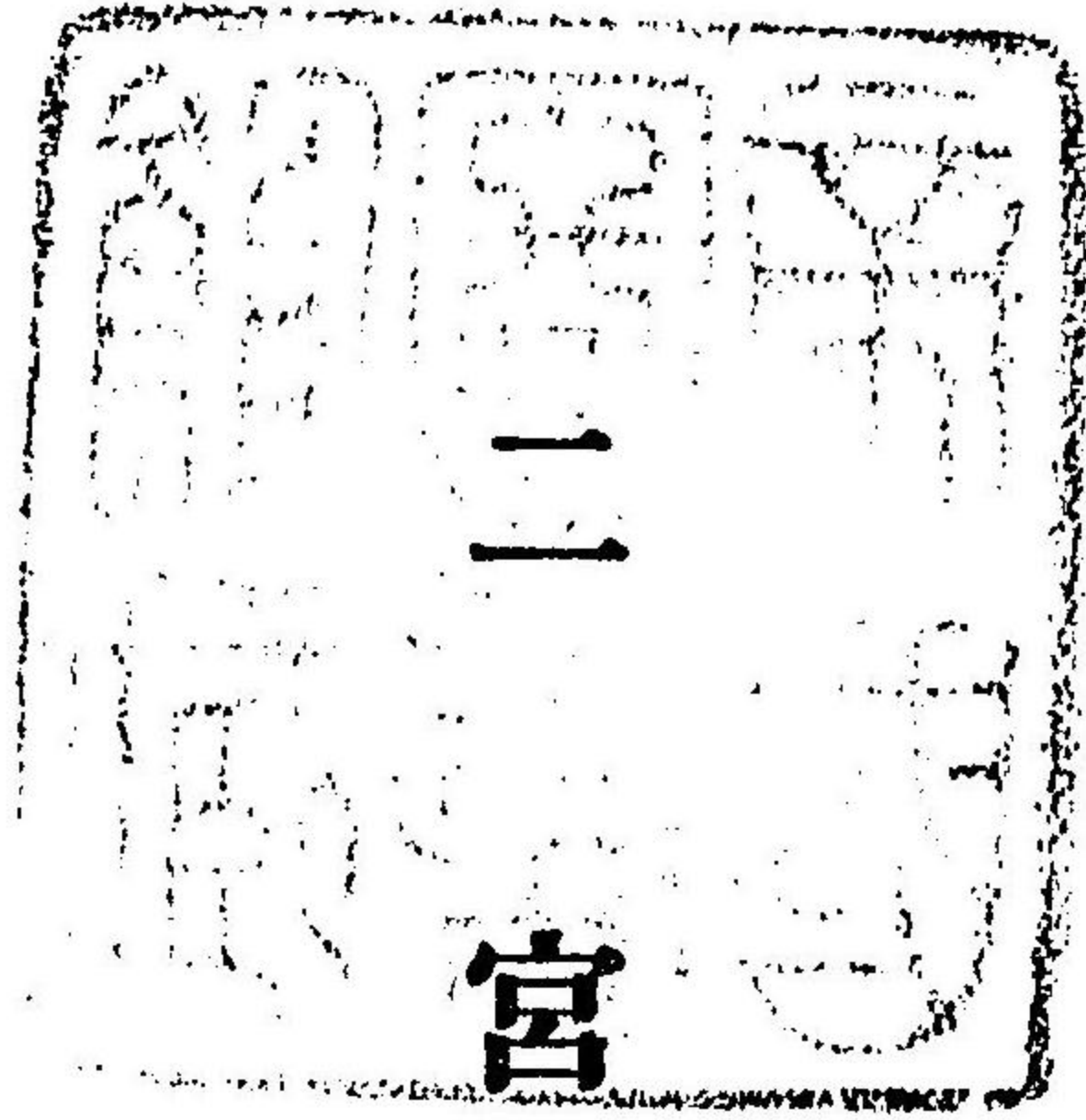








特 B  
128



尊  
德

曉 痴  
紅 遊  
生 氏  
著 序





### 尊徳傳に序す

今の時に於て最も悲むべきは、薄志弱行の徒多きと是れ也、  
商工農を通じて一般に成金の夢を見るの人多きと是れ也、然  
らずんば徒らに大言壯語して一時の豪快を貪るものあるに過  
ぎず、斯の如き輕佻浮華の國民が、果して能く此膨脹したる  
新日本の現状を保ち得べき乎、想へば實に痛心の至りに堪へ  
ざる也。

二宮尊徳は意志の極めて堅實なる人也、能く己れに克つて質  
素儉約を守る、所得廢れたるを興し、敗れたるを整へ、大は  
城地を有せる諸侯より、小は他人の地所に耕作せる細民の末  
に至る迄苟も見るとして將た接するものとして、殆ど其



感化を蒙らざるものは無く、而して其教示に聽て復活の光りに浴せるもの亦尠しと爲さざる也。  
我友曉紅君また蓋し此に視る所ありて本書を著せるものならん歟、其志や偉なりと謂ふ可し矣。  
殊に、懶惰放漫薄志弱行の結晶せるが如き紳士と虚飾虚榮に心身を勞せる淑女との横行濶歩せる今の時に方つてこそ本書の必要は最も多く可有之を信じて疑はざる也。  
謹んで本書が重版の繁きを祈り併せて曉紅君の筆硯彌々旺んなるを祝す。

隅田川の清流に臨める

橋場の僑居に於て

痴遊

伊

藤

生

### 二宮先生撰文

報

父母根元在天地令命

身體根元在父母生育

子孫相續在夫婦丹精

父母富貴在祖先勤功

德

吾身富貴在父母積善

子孫富貴在自己勤勞

身命長養在衣食住三

衣食住三在田畠山林

訓

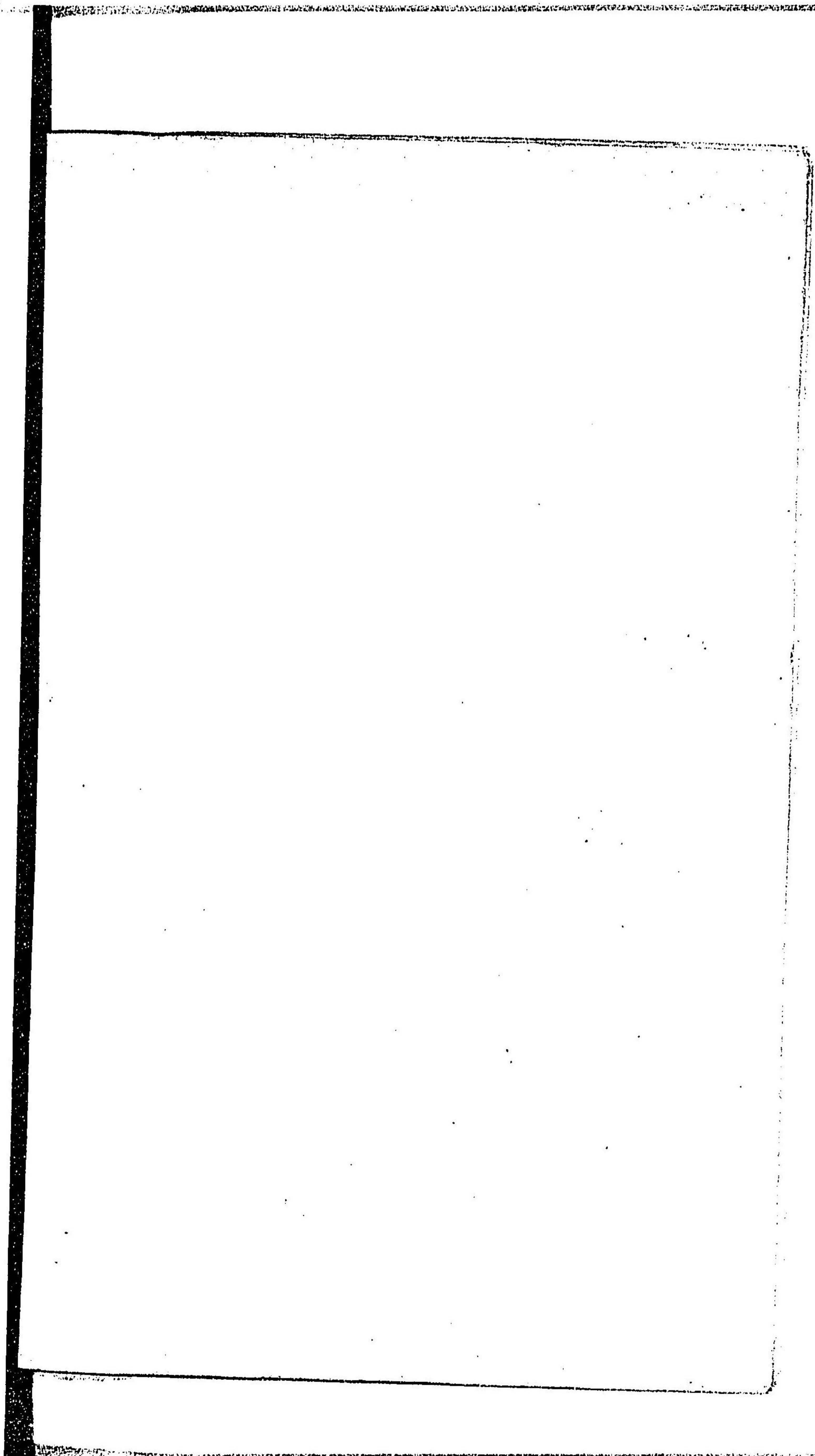
田畠山林在人民勤耕

今年衣食在昨年産業

來年衣食在今年艱難

年々歳々不可忘報德







婦の道にたはる

本は業の

かやいふこと

いふこと

あゝ一途

白き





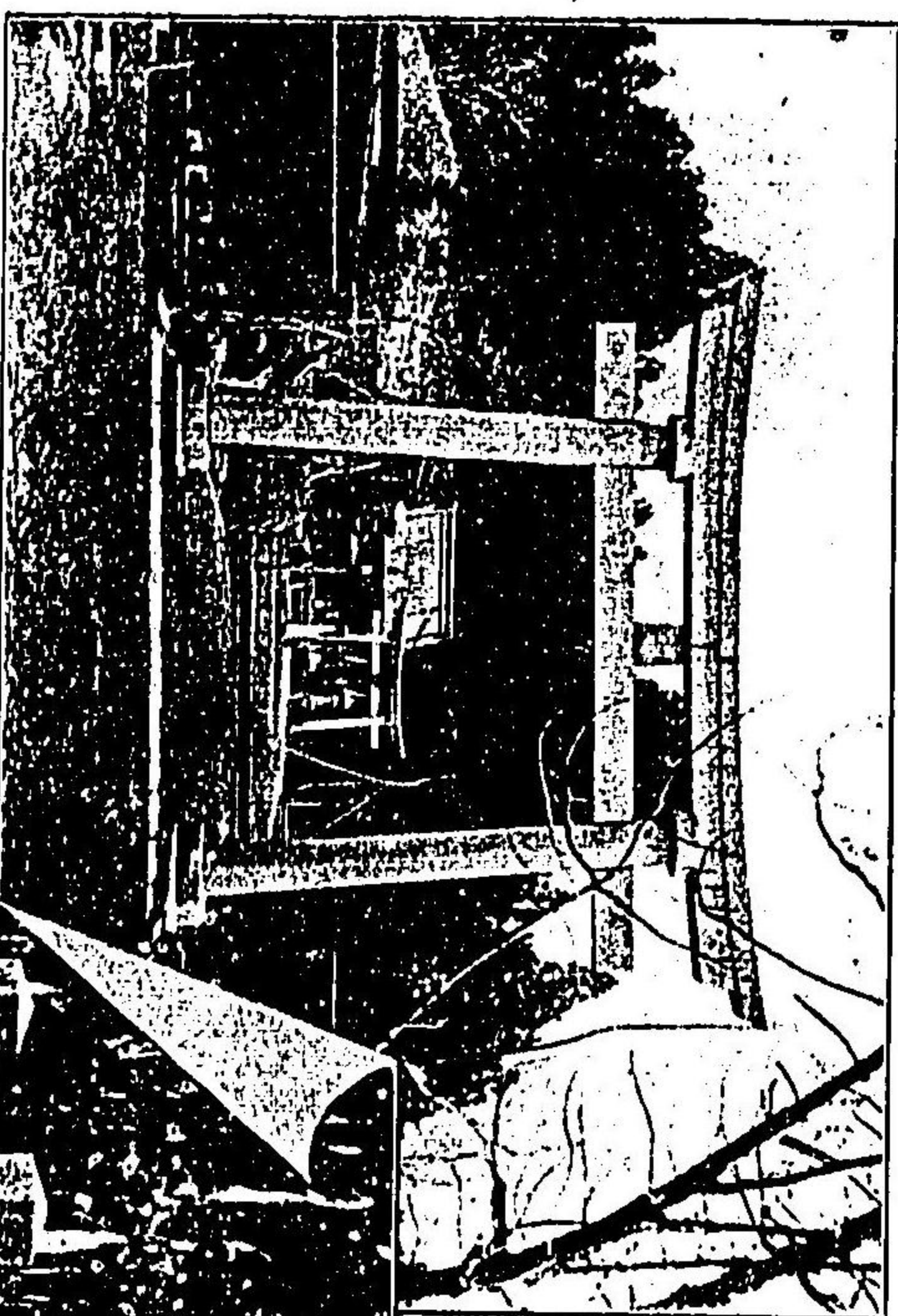
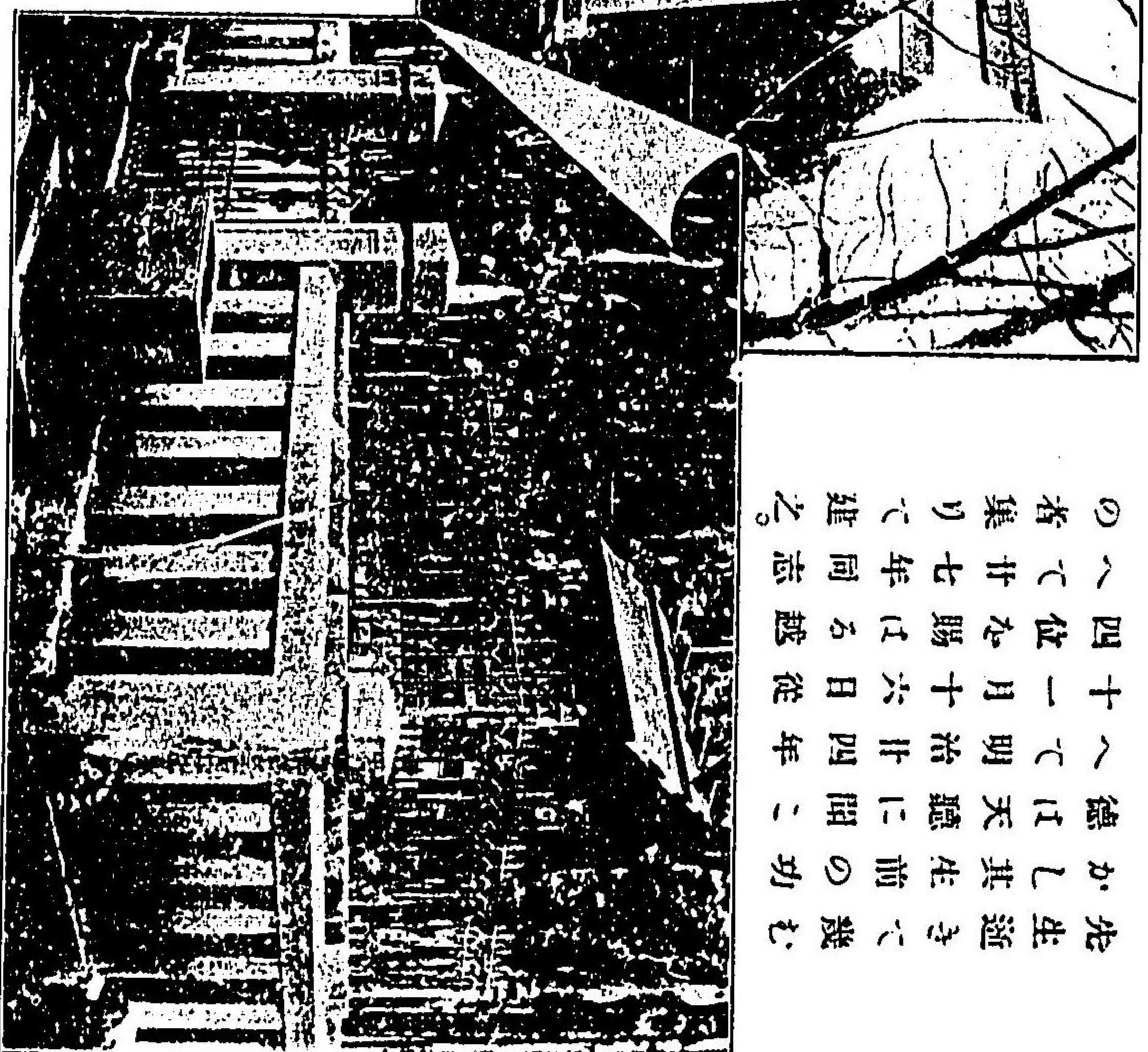
かき  
ま  
の  
かき  
かき  
かき





野州今市に於ける二宮神社其墳墓

先生逝きて幾む  
 かし其生前の功  
 徳は天聽に聞こ  
 へて明治廿四年  
 十一月十六日從  
 四位を賜はる越  
 へて廿七年同志  
 の者集りて建之。



報徳のあるじ  
 世にたぐひふき  
 大いなる人は此  
 屏の内へ眠むれ  
 る、然り其ある  
 じば茲へ眠むる  
 も、其報徳の事  
 は世の進む程猶  
 世へ活て動く



美しき文字も書けませす。新しき想の起せ様もな  
い私共の……考へました。これはいつそ古今ある  
まゝの豪い人の眞實の事を調べて、其立派な行ひ  
といふものを世にお知らせするが宜からうと……  
……恰も此夏の長雨に全國到る處の大洪水。私の  
住む東京の此邊りさへ床を浸すさわぎとなりまし  
た。此時に私は二宮先生が其幼時の事を想ひまし  
て實に深いく感じをおぼえました。既に先輩の  
皆様が先生の事の數々御書きですけれども私は此  
際の感じから筆を起して先生の一生を書いて見た



くてならず。筆を執つたので御座います。元來拙  
 ない書き振で御座います。先生が仰せの至誠と  
 いふ言を心にしておろかながら力こめて書いたの  
 で御座います。

江東水の住居に

明治四十三年八月中旬

曉紅生

二宮尊徳目次

(一) 切れる、切れる……………一	(九) 母子四人……………四一
(二) 唯石河原……………六	(一〇) 偲ぶ苦るしみ……………四六
(三) 草鞋を酒に……………二	(一一) 何の其れや當然……………五〇
(四) 田を賣つて薬料……………一六	(一二) 観音經……………五六
(五) 金が涙に見える……………二〇	(一三) 國音にして讀誦……………六〇
(六) 働き振に肝が冷た……………二五	(一四) 幕前の讀經……………六四
(七) 欣びの手舞……………二九	(一五) 世に望みムります……………六八
(八) キ印金次……………三六	(一六) 留守のつもり……………七三



(二七)	風呂敷被つて	七七	(二七)	仕法分度	一六
(二八)	大いなる人の母	八二	(二八)	妻を迎ふ	二〇
(二九)	利に光る目	八六	(二九)	チト面倒な事	二三
(三〇)	誰れが油	八九	(三〇)	武家の整理	二六
(三一)	行燈へ襦袢被せて	九五	(三一)	五年の留守	三〇
(三二)	其まゝ、草鞋	九九	(三二)	衣は綿服の事	三六
(三三)	休む間の鍬	一〇一	(三三)	餘金三百兩	四一
(三四)	嘗てない笑顔	一〇五	(三四)	四年前の短羽織	四五
(三五)	懐しくてならぬ	一〇八	(三五)	無一文	四八
(三六)	莫逆の友	一一一	(三六)	妻女離縁	五三

(三七)	量器改正	一五六	(四七)	氣味が悪い	一八八
(三八)	百姓でゝる	一五八	(四八)	其大いなる心	一九二
(三九)	御召の御沙汰	一六一	(四九)	結城の御宿	一九七
(四〇)	滔々数千言	一六五	(五〇)	芒の中の夕烟り	二〇〇
(四一)	暇乞	一六八	(五一)	心の堰	二〇四
(四二)	出立	一七一	(五二)	先づ茅を刈れ	二〇九
(四三)	出迎の一酌	一七四	(五三)	青木村出張	二二
(四四)	果して難事	一七八	(五四)	彼れが先生ぢや	二六
(四五)	飄然と去る	一八二	(五五)	河中の大屋根	二〇
(六四)	怪しい客	一八四	(五六)	大凶荒	二四



二宮尊徳目次終

(五七)	黙つて歸れ……………	二二八
(五八)	門前に座す……………	二三一
(五九)	餓鬼道……………	二三五
(六〇)	譯もなくム……………	二四〇
(六一)	初對面に三百兩……………	二四四
(六二)	烏山救濟……………	二四七
(六三)	倉庫開放……………	二四九
(六四)	小田原侯逝去……………	二五二
(六五)	終焉……………	二五四

二宮尊徳

(一) 切れる、切れる

曉紅生

一噫、爲様ねへな、爲様ねへな。  
 今か、今かと襲ひ來たるもの、來たらざるを祈りて待  
 つ。悲しき叫びは、一村何處と云はず、軒の雨垂まで、  
 樹々の葉まで、雨く耳すれば雨く音する。  
 富岳は何處へ、足柄箱根は雲に吞まれて、四邊狭く雷  
 此處は暗い村、雨に明けて雨に暮る、日幾日、何時泣き  
 歌ひか井知れぬ空、さのふはけふに刻一刻、酒匂川の水



は激増して濁流滔々、物凄く河が鳴る、鳴る。

如何て誰が泰き眠りのあらう、時、寛政三年五月末の

日夜半、栢山村各水番の警鐘は彌々事の急を告げた、善

榮寺の早鐘は其異變を報じて連打する、速哉。

「それ鐘ぢや。」

「善榮寺様で早鐘を突く。」

「小童等氣い着ける。」

「婆様さわくな。」

「やア。」

「おウ。」

其處此處に呼び呼ぶ聲は、一氣に混じて全村へ容易な  
らず渡つた。

鐘は彌々みだれ打つ。

「名主様手配する、土堤へ集らしやれ、早く集らしやれ。」

早歩の與十は大聲に呼んで走る、それと人々は斯く期

したる用意の身拵へ、箆笠軽々しく、擧げて一村忽ち土

堤へ駈集る。

此邊り川幅百五十間、御厨河内と相合して、吉田島、

會比、と押押して怒るが如く襲ひ來たる水勢、渦を巻くな

る波のうめき、しど、降る雨、暗愴たる堤上に人々のど

よめき、名主は呼ぶ聲を限り。

「皆の衆頼みまする、ある限りの力盡して頼みまする、

此土堤切れたら、切れたら事ぢや栢山は海となるぞや、

皆の衆が生死、ゑらい境ぢや、よいかな、土俵の用意、



よいかな、頼みますぞや。」

一同合点の間も速し、土俵を擔ぐ力息、押來る水勢を逐はんづ。

「呼べや、呼べや。」

音頭に連れて鯨波の聲。

「あうーあうー！」

激流襲ふて海へや響く。

箒り幾所、濁流に映ずる火影、見上る炎々天を焦す、

凄！ 壯！

水の怒り、人の叫び、鳴迫る鐘、雨の音、中に打出す

太鼓の悲調。

辛ふじて其夜は明けた、辛ふじて翌日は暮れた、二日

二夜、人々は死力盡して防禦した、が噫、効無し、遂に効無し。

「駄目だ〜。」

「切れる、切れる。」

一間切れた、二間切れた、五間十間廿間、見る〜水

魔はおめさ狂ふて、栢山全村を呑まんとする。

「もう及ばぬ、退けや、家へ走れや。」

人々は最後の叫び、今ははや其身の防禦より他無し、

水に逐はれて駆戻る家々。

「救ける。」

「逃げる。」

呼ぶ間も遅し、忽ち濁流は押擴がりて、田も無し、畑



も無し、樹々は梢のみ、家は屋根のみ、唯見る一面泥の海と化して了つた。

猶しと降る雨。鐘は止むだ、太鼓は止むだ、聞ゆるは山手に辛々避難の村人が泣き喚く聲、對して遠く河鳴りの凄く。

(二) 唯石河原

山手の木蔭々々に、避難の筈、寄々に憫れなる圍ひ、何詮様もなく、一家の人の頭数へて揃ふを無事と胸撫るがあれば、子の見へぬとて、老人の如何にせしよとて、探ね呼ぶ悲中の悲なる一家もある。斯くして村人は山に二晝夜、漸く暗雲のちぎれを見た。

「空が見へるぞ。」

「ちとお、空が見へる。」

雨も小歌に河鳴りも絶へた、水も引く、引く、何れもホツと太息、見交す顔の皆蒼く、頬笑みの淋しく。

「ゑらい事の。」

「何とも彼ども。」

「無事か。」

「怪我も無いかや。」

問ひ答へは何の他に無い。

小田原の海嘯、酒匂の洪水、年々の夏秋悪い名物の以て名に高い、然らば人々に用意の疎かは無けれ、此年の災害、斯程は幾年稀有であつた。



雲は全く去つた、水は全く引いた、足柄箱根は再世した、懐しい富士は聳へた、幾日振の日の光り、栢山村は明るくなつた、が明るくなつた栢山村は、明るくなつたいけそれだけ痛々しく、衰へが顯はに路は瘦で、押流された田畑の跡は砂のうねり石河原、家々は歪むで、木の根は洗へて、高敷は屈むで、犬は死むで。

其慘狀。歪むた軒場に悄然と立つ者、子を負ふてさまやふ者、物乞ふて走る者、泣いて行く者、水魔に奪ひ去られた村は骨さらばへ、人は實く生氣が滅した、何と云ふ様もな

『東作處おばさん泣いて行つた、皆、皆可憫相だね父様。』

かゝる中に泣きもやらず、圓かな眼に内外眺めて、心の堪へ得まじきひもじさを氣も見せず、幼い胸にも村の姿の哀れ泌みるか、やつと物言ふ口に情け深く這麼云つたは二宮が子の金次郎とて此年五才、さりとはさやうと。

『能く云ふぞ、左様ぢやとももの、したが俺處も此様ぢや呉れて遣る物もない、為様ないな媽。』  
子の天窓撫つ云ふ。

『はいな。』  
答へた妻は、乳呑兒抱へて續く日の難に面瘦れ辛々家こそ残りたれ、押流された田畑の舊に開かうは却々、頼みなき身の、翌日と云はず今の前想ふて。



「呉れう處か、良人。」

張有る氣なれ道が女の、互ひ夫婦の身は兎まれ、兒等が上想へば、つい胸の迫まる。

「何の、什麼かなる、什麼かなる、な金次お前も今に働かうぞ、あは、い、い、聽て父様が腕ぢや。」

「あい働く。」

「よし、よし、其れ見ろな媽、お前とて友吉負ふて同緒にやらうぞ。」

「そりや仰有るまでもなけれど……。」

「なりや苦勞は無、什麼にかなるが。」

「然様ぢやて、此中にも物あらば人に遣らう氣、善い事とて良人御心が寛りと過ぎる。」

「媽其りや誤ふた咎ぢや、あらば遣らうが人の法ぢや。」

「能ふ解つては居りますれ……。」

「俺や、自己が喰へぬより這麼時人に物遣れぬが辛い。」

(三) 草鞋を酒に

金次郎が父利右衛門、姓は二宮、遠く先祖は鎌倉に時めさし武士とや聞く、幾代の孫野に下つて此處栢山村草分け、大農となつて亦幾世、當主此利右衛門性得のやさしき心が、却つて身の難に、情けは人の爲ならぬ筈を、兎角人の爲にのみ過ぎて、薄れ行く世に盡した報ひは、何事ぞ其身の生計の年毎に細り、塙て此年の災害に一層困苦は極つた。



利右衛門今は性来好む酒の、其せめてもの思ひやり僅かの嗜みさへ断つて、星に出て星に戻る働き、妻は乳香兒負ふて共々及ぶ限りに、金次郎は悪戯に働かさう手を健氣な草むしりやら、斯くして一家は孜々として剛み、剛めど、稼ぐに追いつく貧の方歩み速く、徒らに年のみ過ぎる。

哀れ利右衛門は貧の苦と過度の骨折に元氣衰へ、封じた酒に張は弱つて、見離れぬ眼にも瘦の見へる、夜々淋しい膳の對向ひ。

「媽つまらぬものだな、盡して貰ふとて人に盡しやせぬけれど、愚痴も出様かい、恚様して稼いで何時酒の飲る事か、金次や友に着物一ツ着せるぢやない、情けに盡し

たとて御代々が丹精の田畑失した罰か。」

利右衛門めつきり愚痴になつた。

金次郎脊丈伸び漸く八才、子に心も夜毎に其れを聞く

取辛らく、痛はしふてならぬ一心に、父母が田に出た留

守しなから、弟の守しつ葉打つ事能く覺へて、草鞋作る

事巧みに、而して密かに蓄へた幾足、一日市に賣つて酒

に代へ、或る夜の膳部に何年振か徳利が載つた。

利右衛門其れと見て、好物の竟心卑しく喉は鳴れ、不

審の眉寄せて。

「此酒何ぢやな、媽けふ誰れぞ持つて來てか。」

『何のソ』

『ぢやて、お前買ふ筈もない。』



草鞋を酒に

「今日金次が買ふて、父様に上げよ。」

「何、金次が。」

「はい。」

「買ふたとな。」

「褒てやつてな、良人……。」

妻は息はづむ様云つて、何か急にはらくと涙を落した。

「金次が酒買ふて来た、解らぬ事、金次が何うして金を持つ、如何な好きでも解らぬ酒は飲まぬ、間違ふた酒は嫌ひぢや、金次此方寄れ。」

利右衛門は聲高に、怖い顔、顫顫が動く、妻は膝すり寄せて。

「えッ良人、何仰有る、何仰有る、良人があれ程好きなの御酒を廢なされた、御氣淋しいを想ふ金次の一心、私等が田へ出た留守の間、友の守しながら草鞋作つて、けふ市に賣つて戻りに、こ、こ、此酒上げよと買つたとい、其顔良人が解らぬ。」

さり、と云ふたが、再たせぐり来る涙、母の後方に小さく座つた金次郎は。

「父様怒らすと、向後毎晩お酒上れ、一合宛なら屹度買ふ。」

聞く利右衛門は、やにわに金次郎の手を膝へ引寄せて。「あ、然か。」

とばかり、此れも涙のはらくと落る。



四

田を賣つて藥料

斯ばかり心美しきが揃ふ家に、何時まで然様世のつれなきか、利右衛門此頃兎角して身軀秀れず、以來幾年一日欠かさぬ金次郎が心盡しに仕事終つて夜々の酒の味、其れさへ、嬉しい酔はやがて理に落て泣上戸、醒て痛む氣が病ひの元となつてか足ない中に重い枕の遂に幾月、貧は彌が上に襲ふて、酒の代より金次郎が草鞋作るをけふは生計の補け、妻が一人の野良仕事、何思ふにまかせ様、殊に此頃酒匂川の土堤普請、利右衛門の名代にとて村へ奉公の金次郎は小さき軀を大人に負けぬ終日の働き夕べ戻つて勞れもないか、其れから藁打草鞋作り。

「父様、今日は氣分は快いか、早ふ癒つて酒飲む様なつて下され。」

「濟まぬな金次、堪忍せ、癒らば父様働いて着物着さうぞ、好きの本買ふてやらうぞ。」

「私も働く、酒買ひます、父様は本買ふて下され、嬉しい事な、氣分些快くば翌日あたり土堤の普請見に行きなされ、なア母様、宜ふ築けたな。」

「其れ、些歩かしやるも可い、久しふ富士様の顔も見なさらず、餘計氣が沈まふに。」

「然様ちやの出掛て見よか。」

「父様、私手を引いて行く。」



田を賣つて薬料

内に厚い介抱、外に一生懸命の働き、妻子が盡す真心に、いつか利右衛門力着いて、日一日と快方に向ふ、幸い中にも此上無いよろこび。

したが、さなきだに細い生計の、過ぎし災害と云ひ茲に長の病ひ、癒つたがさて什麼爲様か。

斯かる中にも正当な利右衛門、幾月薬料の滞り、謂は命の親の醫者への禮、他ならぬ事の癒つて見れば、出

来ぬとて出来ぬては濟ぬ、さりとて如何に爲様もない、さりとて如何で捨て置け様、と家の事より義理に正しい

氣は、病ひの後の又の想ひに胸の痛み、辛い思索重ねて。『長い事苦勞かけた、お蔭での最早すつかりと元の身軀

に戻つた、が、媽金次斯様なつて見ると、醫者様の藥禮、

何よりも俺や氣になる、此儘て居たら亦氣が病める、第一が如何に家方が難義ぢやて、二宮の家名もある、義理

欠いちや死ぬより辛らい。』

『眞個に仰有る通り、が、什麼爲ましたものか、方の無

いに困ります。』

妻は汚れの襟に願うづめる。

『精出して草鞋作らうて、却々及ばぬ事な父様。』

腕組む金次郎。

『うーむ、あのな……』

利右衛門何か言い出て兼たが、思切つた聲に。

『彼の田地賣つて了ふて。』

二宮徳



(五) 金が涙に見へる

「父様彼の田を賣る。」

「そりや何としてもあんまり。」

妻と金次郎が膝詰るを、性得動かぬ誠直の利右衛門は頑として。

「御先祖様が丹精の田畑、俺が入らぬ情け心に大方失してのけた、其上をいつぞやの洪水に押流されて此方の苦現、それでもどうませ幾秋の油汗に取返した彼れだけの田地、賣たい事ない、御先祖様へ對して、家の爲想ふて賣たい事ない、ないが爲様ない、命の代とも云はう薬禮、放つて置いては俺や氣づゝ無ふて此後仕事も手に乗らぬ、

思切つて賣る、義理ぢやもの御先祖も御許さる、氣にかゝる事濟ませて此れから亦精出してやろ、な俺や然様決めた、賣ると決めた、鳥渡行つてこ、止めな……。」  
「賣つてまた後の難義の奈何程と想ひは切なれ、事は正しい利右衛門の心、真正に否む言葉はない、意に任かせて待つ間旋て、未練残さず賣渡して、得て戻つた金子二兩。」

「此れて醫者様藥禮も充分、胸の支へがグイと下りた、道川様今時分居なさるか、ま一度出掛る。」

座る間もなく利右衛門は、命削る様な田地賣つた金子懷中に、命延びた禮にとて醫者村田道川方へ行く。



金が涙に見へる

其病上りの後影、身窄らしとて、神も宿らう、其美し  
き正直の心に。

『善いお心な父様は……』

『出来ない事よ。』

母子は後に泌々言ひ合ふ。

薬味箆筒、唐机、利右衛門は道川が前に畏まりて。

『先生様、度々の御見舞御手當、お蔭様で鉄の柄も最早

摺める様になりました、早くに御禮に出ませにやならぬを、

御存じの中、悪しからず御察し頼みまする、就さまして

お薬禮の滞り、何卒御納め下さる様。』

汗拭きながら金差出せば、道川は金と利右衛門兎見斯

見。

『何ぢやな此れは。』

『御立腹もムりましよが、はいよい氣で過ぎたぢやムり

ませぬ、長ふなりましたは御堪辨なされて……』

あづく云ふを、其れは訊かず、道川はむづかしき顔

に。

『利右衛門殿失禮かも知れぬが、お前什麼して此金調達

なされた、氣遣ひも程にしなされ。』

其聲は高い。

『は……』

利右衛門は呆然。

『知れて居るお前處の骨折れる中、此金何うして俺が取  
らうか、俺やのう利右衛門殿、金取る氣で薬上げたぢや



金が涙に見へる

ない、見舞ふて上げたぢやない、持つてムらぬとてお前の心の美しい事は知れてある、あらばこそ毎々骨も折らうぢや、よいかの、俺や折角病い癒して苦勞させる様な事きつい嫌ひぢや。』

『.....』

『此金持つて歸へらしやれ、而して物賣つたなら買戻して、借てムツたなら返しなされ、無い中に物賣つたら不自由せう、金借りたら利分の上に恩が被る、いつまで延び様が俺や藥禮に利はつけぬ、解りましたか、強う云つたは許るされ。』

『めつめつさうもない.....』  
醫者は聲低く情籠めて。

『利右衛門殿、俺や此金が涙に見へるぢや。』  
『は、は、は、』

(六)

働き振に肝が冷た

如何に心濟まねばとて、如何に家の名想へばとて、其れを頼みの足あい田地賣つて得た此藥禮、一氣に妻子へ押つけに言ひ訊けて持つて來たもの、誠正しき心の張りに醫者の前へ並べたもの、想へば血の出る様な金、涙のにじむ金、見へ透かうが道理か。

金を其儘手も觸れず、情け餘る道川の叱言厚き諭し、難有き針に痛入て利右衛門は、熱と俯向く眼に涙さい潤ひ、さりとして其言葉のまゝに従ふて、此金持つて歸らうは如何

二宮尊徳



働き振に肝が冷た

何にしても心に済まず、とて亦否みて意地張るは己が身を知らずで人の心を無にする事、兎せん角せんと膝に手を置いて黙して暫く、やがて。

「先生様御言葉、難有い事。解つてムりまする、能う解つてムりまする、御察しあらう筈私瘦世帯、嘘作らうて物申上りや又のお叱りもムりましたよ、眞實此金辛い工面して持つて参りました、したか辛い工面には其れだけの覺悟がムりまする、先生様御手當受けませぬば死むても退けた命、此後其氣で働きますりや、只今の身に餘る金とは申せ此程のもの聽て取返しもなりまする、然し亦折角の御言葉、其りや今日の場合、銅一枚にしてからが何程かの役致します、で私斯様存じまする。」

二宮尊徳

息を切りて。

「御言葉返すぢやムりませぬ、悪しふ無ふ御訊き取下され、私御願ひ、先生様此金半分だけ御納めの義、如何てムりませうか、意地ぢやムりませぬ、私心の虫に合点させますまで、半分を持歸つて厚い御情けの事家内の者に喜ばせませう、何の先生様、長ふ病みました上りとて、はい御訊き下され、金次の奴十二才年齢の割に稼ぎ呉れます……。」

自慢で無い斯る時這麼云ふも親が情の眞、道川は頬笑むて。

「ち、其れ、お前處金次殿、豪い者な、此頃土堤築きの手傳ひに其働き振見て肝が冷へた、俺や城下の病家見



舞ふて戻り道、最早日の暮れうと云ふを、村方の衆の皆  
 行んで了ふた後、金次殿は唯一人で土堤に働いてムつた  
 今時分まで何してちやと問へば、小供の足らぬ働きは皆  
 様と同時に退け様ちや同じ仕事になりませぬ、然らば皆  
 様より朝は早ふ出て、一足遅う戻ります、其れでも却々  
 大人衆に及ばぬ事、年齒の足りぬは爲様ないものでムり  
 ますと、まア斯様云はしやる、俺や涙が出たわ。』  
 『はい、然様申しましたかな、先生様私甘いと御笑ひ下  
 さりまするな、金次は其れから戻つて草鞋作るでムりま  
 す、而して媽と共に私の介抱………』  
 眼頭の涙拭ふて、急に聲高に。  
 『あは、、、、猶且親莫迦な、子の自慢………何は兎

に角何卒此金半分だけ清う御納め下されます様。』  
 道川は頷きつ。  
 『何處までも堅い事の、其れ程に云はしやるもの、はい  
 心快う受けませうぞ。』  
 (七) 欣びの手舞  
 聽て利右衛門暇を告げて玄關を二三歩、送り出た道川  
 は、と呼び止めて。  
 『あ、利右衛門殿。』  
 『はい何ぞ。』  
 『他ぢやない、お前稼ぐ様なつたら、夜の暇に金次殿俺  
 が處へおこされ、些書物なと教へやうに。』



「え、其りや真個に、まア願ふてもない、實はな……。」

利右衛門草履の爪先へ凝つと眼を落して。  
「届かぬ中の、金次の奴其れの思ふ様ならぬを時折の愚痴、辛ふ訊いて居りましたが、はい、はい。」

幾度か辭儀して。

「什麼に喜ぶでムいませよか、着る物被いても本知りた  
いと申ます。」

「左様かの豪い奴、遠慮無ふおこされ。」

「難有い事。」

醫者の門いそくと出る。

利右衛門性來酒好む程の、何れかと云へば陽氣な質、  
且は人に情して財失ふ程なやさしさもの、心にわたかま

「箱根山をば暗しと通り、花の小田原星月夜……はッ  
はッ。」

知らねば心狂ひしとも見へ様か。

りと云ふもの毛程なければ、身に欣びある時は人一倍氣  
の揚るが平常、田地賣つて退けた貧の中の病上りと云へ、  
道川が厚き心に、持參の金を半分は元の懷中、半分を清  
く納めて呉れたに心も徹つて氣も晴れ、殊に金次お  
こせ書物教へやうとの嬉しい土産に、子の喜び顔見様樂  
しさ、残る一兩に翌日は金次城下へやつて本買はせてや  
ろ友吉にも着る物一枚も着せう事と、簾蔭の近道戻り來  
る、これから何か運の花咲き、春の心に知らず笑まれて、  
唄さへ出る。



「やアおかし。」

「金次處おちさん踊つて行く。」

村の童は後から躑いで三人四人、利右衛門門邊に来る頃はぞろぞろと着いて居た。

振返つて。

「あは、来たな、何ぢやねぢさんが狂ふたぞ、左様も見へ様かよいわ、花の小田原星月夜はッはッはッ……。」

「わアい〜。」

童達は打囃す。

父があまりの歸り遅さに氣懸るまゝ、迎へにとて金次郎出様とする門邊の噪ぎ、何事と見れば父は手舞ひして

物狂はしきばかり、惘然と駈寄り。

「父様、父様何でムります。」

氣遣はし氣に顔ながめつ、亦童達逐ひつ。

「皆又何を躁ぐ、歸へるッ。」

「金次叱るなよいわな、欣び事ぢや、お前にや此上無い土産がある。」

「まア何てムりますとも、外で其様な噪ぎ、皆彼の様笑ひます、御入りなされて、まアどうした事か……。」

漸く利右衛門家へ入つて、座る間も。

「金次、媽まア斯様ぢや、俺やけふ程嬉しい事はない。」

息はづませて。

「彼の先刻の金持で行つて道川様の前へ差出したら、道



川様突如叱言ぢや。

「叱言云はれて其れが良人何嬉しい。」

妻は氣訝。

「まア黙つて訊かうぞ、其叱言はの道川様が情けに厚い心、辛い中で何苦勞して這麼金持つて來たぞとの叱言ぢや、其れから長うやさしふ解いて、入らぬ氣遣ひせず金持つて行こ藥禮は何時まで過ぎやうと利はとらぬ、と斯様仰有る。」

「はいマア。」

「然様ぢやて、其れでよいわと俺や持つて歸れぬ、其れぢや苦勞した氣が徹らぬ、乃て俺や彼の金半分だけ取つて下されとお頼みしたら、然らばと心清く受けて下さ

れ、而してな歸り際、金次訊かうぞ。」

「あい。」

「金次を夜るくおこせ、書物教へてやろと仰有る、件麼ぢや此れや金に代へられぬ土産ぢやろな、お前が人となる元ぢやあるまいか。」

「あの父様、其れ眞の事。」

「誰が嘘云はふ、もう俺の身軀は本復なりやた前夜仕事迄せずとよい、翌日からでも道川様處行つて、書物教へて戴かう。」

「其れや嬉しいな。」

「でな、残つてある金で本も買はふぞ。」

「あい。」



「情け盡した報ひ、愚痴云はずとも、な來るものぢや。」

(八) キ印金次

利右衛門彌々健康に復した。  
稼ぐ程にどうませこませ、朝立つ籠の煙り夕への膳の  
甜德利、足らぬも足りて日は過ぎる。  
妻は其中又一子を擧げた。  
金次郎の働さ、助けて餘る其暇を村田道川が情けに讀  
書重ねて憊まず、一を聞いて萬賢さ質は、大學實語教に  
道を開いて、文字一字とし究めねば止まず、讀を教へに  
解を己れに知らばやと、山に野に道の往復にも書を離さ  
ず、一句自得せば知らず頰笑み、得ならぬ章は幾度繰返

し、行合ふ人のありやなしや途上己と書物の外知らぬ。  
村の童は指さして「キ印の金次」とあらぬ名を呼ぶ、何其  
様な事に取貸すべき。  
金次郎は後の尊徳、神と祀らるゝ身の凡ならぬ芽生て  
ある。  
今日し栢山村鎮守の祭禮とて、女子小童は云ふもさら、  
若衆輩はけふこそと日頃のたしなみ、村一番の笛吹さや  
ら、相撲取やら、宮の森の賑やかさ、神樂囃子、土俵の  
呼び聲、さては小旦那連の芝居事。  
道が金次郎もけふは仕事休み、さりとして此さわぎ、と  
てもは「キ印金次」とてひとり超然、酒匂の土堤を本讀み



つ歩む。

「阿兄様苗買はんかな。」

背後に呼ぶ苗賣の老爺、金次郎書物読み入る耳は空。

「子曰不患人之不己知患不知人也」

幾度か繰返して、心に得たか微笑しつ。

「左様ぢや、其事ぢや。」

けふ静かな酒匂の流れ、箱根足柄の山つゞき晴々と富

士は高く、土堤の松柳とろく見渡す田の面、大河は

清く、草に憩うては歩元を飛びゆく蝶、前髪立の書を讀

みつ行く少年、後より呼ぶ苗賣の老爺の頬冠り、鎮守の

森の囃子が遠く。

「苗買はしやらぬかな。」

聲高に、漸く金次郎は振返つて。

「何ぢや苗買へと。」

「はア松苗ぢやが、阿兄様如何ぢや安ふ賣ろぞ、祭禮へ

行ても遺はうなら、此れ買ふて庭に植附けて見なされ、

お前大人になりや並木が出来、むづかしい本讀みなさ

る秀れた阿兄様、見懸けて呼びましたぢや、老爺助けて

お呉れなされ。」

「爺様、見懸けて賣らなら村にや立派な家もあるに、お

前知るまいが俺や村一番の貧抱な家の子ぢやが。」

「尤も、イヤ御言葉ぢや、ぢやが阿兄様や、立派な家の

人ぢや兎角情けがない、丹精の苗貶しくさつていぢめて

買はふとばかりする、俺や其れが忌々しい、とても賣ら



「印金次  
なら、お前の様な子に、末の毒、芽出度い松の苗賣たい、  
安ふする、買はしやらぬか。」

「面白い事云ふな、嬉しい事云ふな、したか爺様、買ふ  
てもよいが俺が處にや庭が無い。」

「ほう。」

「が、待なされ……………」

金次郎は暫く首傾げて居たが。

「おゝ然様ぢや、安ふ賣るなら其苗皆買ふてやる。」

「へい。」

老爺は氣訝な顔に。

「阿兄様、如何に賣たいとて無理に云ふぢやない、庭が  
無いと云はしやるに、爲様あるまいがな。」

「庭はないが、其苗此土堤の端へ植へて、末長ふ水の防  
ぎに爲様と思ふ……………」

「何、水の防ぎする。」

「あい。」

「其爲にお前買はしやる。」

「が爺様、安ふしなされ辛い中で蓄めたほまぢや。」

「安くせいでか、安くせいでか。」

此時買ふた松苗幾株、今も酒匂の堤上に榮へて、尊徳  
先生の昔時を訪へば、想は深き緑の色。

(九) 母子四人

利右衛門は又病むだ。



母子四人  
何事ぞ、何を天は斯くばかり善良の家庭に悲しみを興  
へる事ぞ。

情厚き村田道川が懇ろの見舞、妻子が介抱いつもなが  
ら、及ぶ限りの熱誠も、効ないかな、日にく重りゆく  
ばかり。

遂に寛政十二年九月廿六日夜の引汐、男は盛り四十八  
の利右衛門は、母子四人を枕邊に並べて永眠した。

傾く茅屋の軒に想ひ残して西へ行く線香の煙り。  
乳香兒を抱へ、金次郎友吉を膝の左右に、母子四人は

泣いて泣いて泣きぬいた。  
通夜回向とて、寄る村人は口々に。  
「氣の毒さ何と申さう言葉はなけれ、金次さんはもうい

つばし。」

「其中友さんも兄様に負けまい事、末のもそれ男子なら、  
何の苦勞があるかい。」

「男子三人とは此上無いお子持。」

「如何に健壯ちやて、子の無い人の末見なされ、な然  
様ぢやないか。」

「氣を落さずと、お子等を大切によいかなく。」

後の氣折れぬ様と張をつける、張をつけるもの、裡は  
皆も憫ぶ涙。

野邊送り、七日もいつか、新らしき位牌に二男の友吉  
が小さき手合はせた後ろつき、母は涙の眼を拭ふて。

「金次、さて相談して置かにやならぬは此後の事、彌々



お前が家の柱、確固と頼まふが、まア甚麽方法しなさるか。

「甚麽も這麽もムリませぬ、出来ませただけ一心に働かうが何より、他に考へますれば悪い智恵となりましょ、私には番一向きに働きまする。」

「あゝ、賢ふ云はしやる、お前が其氣でさへ居てなら私もきつい安堵、したが父様御在なされてからが却々に難義な朝夕、就て私や這麽決めましたが、お前什麼想ひなさるかな、金次……。」

「はい。」

「私とて向後はお前に負けず稼がにやならぬが、さア乃で困るは此れ何分にも此富次郎が膝離れぬ事、乳房當が

つてのみ居てぢや、奈何働さ様もない、就ては此りや辛  
い事なれ是非もない、日頃義作様の何くれと優しふ云ふ  
て呉れるに縋つて、遠い縁ではあれ血筋なり殊に兒の無  
いに淋しいの繰言、頼むたら聞いて下さる、私富次を彼  
家へ當分預け様と想ふかの……。」

何手離したからう、身を斬られる程辛い事のさりとて  
然様もせねば、如何に金次郎の心強いとて、未だな十四、  
他所の子ならば獨樂當ての棒ちぎりの、やんま逐ふて走  
るげな如何な事其れを頼りに見て居られう、思切つて斯  
く言ひ出でる。

「母様御言葉、強い事でムります、お止め申したいは一  
杯でムりますすれ、其れ程の御覺悟なりや、些の間然様し



て辛抱なされて……はい、私も可愛い弟の事、一緒に居たうはムリなすれ、是非もムリませぬ、何分にも今日の場合、御心に任せまする。」

(十) 徳ぶ苦るしみ

利右衛門一度の快方に田地又何程か取戻した、取戻した其れは、其死、其悲しき始末に又失ふた。頼るべき人と頼るべき田を失ふた二宮一家のやる方なき悲境は、残る母子の如何に働らかうとて事足るべき、さりとして徒らに悲歎にのみ暮るゝ日は過ぎぬ、金次郎の健氣さ、母も乳呑兒を他家に一生懸命。其一生懸命の氣の疲れか、夜毎母は臥戸へ枕並べた子

等の取厭ふて、何ぞ徳ぶ苦るしみの、息迫りては堪へ得ず高くなるに、金次郎は耳敏く。

「母様。」

問へど母は息堪へ堪へて眠りを装ふに、金次郎は其苦るしみ隠す思ひ遣りが却つて怨めしく、起出て枕邊に座り。

「母様、何處ぞ悪いのでムリですか、母様、母様。」

重ねて呼ぶに、道が装ひもなり難く。

「いゝ奈何もしやせぬ、心配せず寝てたもれ。」

「奈何もせぬとて今の前の苦るし相な息、平常の息ぢやムリませぬ。」

「何ともありやせぬ、唯何ぢや知ら訝しな夢見たまで、



— 御ぶ苦るしり

「隠されたげな。」

「いる母様其れは嘘、隠されたお聲ぢやない何處ぞ御苦  
るし相な、苦勞させまいとて御隠しなさるか知らぬ、御  
隠しなされば猶苦勞致します、父様は在ませぬ中、御病  
氣なら無理な堪へせず、仰有つて下さりませ、道川様彼  
の情け深い方、な若し母様、甚麽ぞなされたでムりまし  
よ。」

「諒くも問ふて止まぬ切な心に、母は涙のみ湧きて答へ  
も爲得へず、枕上げる眼は泣き腫れて、斜めに細き行燈  
の灯り淋しく照らす、手結びの髪のいつのまゝか、頬の  
瘦れも痛々しい。」

「金次。」

「はい。」

「隠さうとて察しの早いお前の氣、苦勞多い中に苦勞さ  
せては濟まぬ事、云いますが、私病氣といふぢやなけ  
れ、こ、これ、富次を預けて此方、乳房が張つてくど  
うもならぬ其苦るしさは云ふ様もない、寒む氣がするや  
らツイ太息も高く出る………な金次、云ふは何ばう氣の  
張の無いと思はふが、此れ程餘る張つて苦るしい程の乳  
を此儘、乳の無い人に子を預けた不仕合せ、想へば私や、  
私やな金次………」

息切りつ、涙は又はらくと溢れて、胸は迫る、聞く

金次郎は。

「母様。」



思ひ極めた聲は高く。

「今から私、義作様處行つて、富次伴れて戻りましよ、

もう預けずと翌日から又私奈何なとやります、な母様、

私奈何なとやります。」

氣は早く立上るを。

「いる、いる、其れぢや私が我儘過ぎる。

止める母。」「何仰有る。私ぢやとて其乳富に吞ませたいもの。」

(十一) 何の其れや當然

草履しとく露の夜道、金次郎は急いでやがて来た義

作が瀬戸の枸杞の生垣、密とくいつて、折角寝てあらう

を此方が儘な頼みに起すは氣の毒なと、暫し立佇むで家  
内うかゞへば、乳を戀ふらし、富次郎の泣く聲。

「おゝ誰がよ、誰がよ、媽早く爲様ぞ。」

「それく最早出来るがな、こつくりと旨い乳が出来る  
がな。」

「早ふ持つて來な、おゝそれよいぞく。」

義作夫婦は寢もやらで、米の粉にこしらへ乳の丹精か、

兒は頑是無く頻りと泣く、聞く金次郎は。

「噫あれだものな……。」

「義作叔父様、未だ起きてか。」

聲懸ける。



何の其れや當然

「何ぢや、媽外に誰れか呼ぶ。」

「左様な。」

言ひ合ふて。

「誰れぢやい。」

「あい私、金次郎……。」

「あッ金次さんさうな、何ぢやいま、今時分……。」

「あの些、急な事が出来まして。」

「何ぢや急な事、お袋殿病ひでもか、氣遣はしな、媽早

ふ戸を明けろへ。」

「真に此頃は季候が悪いでな。」

云ひつ戸を明ければ。

「いえ左様ぢやない、左様ぢやない。」

二宮源徳

金次郎は入りながら。

「お袋が何としたでもムりませぬ……。」

「義作が懐ろに泣く富次郎を差覗きて。」

「叔父様富の奴泣きまして、為様ない奴、晝の疲勞も暮

らいに今時分起きて、お世話かけます、濟まぬ事な。」

「あは、何云ふ、俺等は此厄介が楽しみぢやが。」

義作が云へば。

「真に、子を持たぬ私等は此れが爲たいでな。」

「媽も共々、米の粉の乳あてがふて漸く泣き止む富次郎

の顔、義作は懐ろ金次郎の前へ差向けて。」

「それ見なさろ、眼を細ふして米の乳呑むてぢや、な金

次さんや可愛いものな……其れやよいがまア何ぢやい



何の其れや當然

急な事とは………。

「おい叔父様、急な事で其の………。」

鳥渡つくむで。

「勝手な事、叔父様よくくちや、叱らずと訊いて下さるか。」

「あは、何ちやてお前の様な好い子叱ろかい、甚麼無理でも云はしやれ。」

「難有いな、なら氣も急ぎます、遠慮無く云ひます、な叔父様、叔母様。」

金次郎は今の前の家での一部始終隠さず語りて。

「………と云ふ理由、勝手なが富次連れて戻らうとて来ました、氣に障へられず、な、何卒な。」

二宮尊徳

「おいの左様あるとも、何の氣に障はろ、貰ふたのぢやない預り物、お前が向後其上稼いでた袋殿に苦勞させず、富次育てて退け様立派な心、俺や喜むで渡す、其れ程な乳捨てこしらへ乳の足ないで育立様は、第一可憫な事ぢや。」

「したが金次さん、亦向後の骨折は一倍、年齢もゆかぬにきつい事な。」

「何の、何の叔母様其れや當然ぢやが。」

「うむ、うむ。」

義作は頷きつ。

「な媽、愚痴なが這麼息子持った親は什麼幸福か。」

「真に、真に………。」



金次郎の健氣な言葉に、子無き身の淋しさに、義作夫婦は密と泣く。

『はれ富次よ、家に行て眞の乳が多分呑めるぞ、阿兄様  
が迎ひぢや、嬉しいか〜あは、笑ふて居る。』

義作は富次を金次郎の脊中へ、媽は背後から襦袢被け  
て富次へ鳥渡頬擦り。

『富坊、又來様ぞ。』

(十二) 觀音經

金次郎は富次郎を負ふて戻つた。

戻れば茲に、母子四人が同緒居の樂しふはあれ、うなひ  
兒の詮様も無い乳房離れねば母が稼ぎの思ふまかせぬ、

心強いとて未だ肩上げの金次郎がひとり働くに一家が頼  
る氣づゝなさ。

亦金次郎は其案じさせまいと、朝夕笑顔に元氣見せて、

出ては耕作木を樵る柴を荷る、戻りては細絢ひに草鞋作  
りに、秒の間も惜むて何かと努めぬ事は無い、而して、

而して柴負ふて道行くに、家に在て草鞋作るに、學びの  
本を離さなかつた。

時に一日冬の夕べ、金次郎は城下へ用しての歸るさ、  
日頃厚き信仰の觀世音へ詣でばやと、飯泉の森の木枯寒

き御堂の軒、階段の下に跪きて、一心一向。

『觀世音、南無佛、與佛有因、與佛有緣、佛法僧緣、常  
樂我淨、朝念觀世音、暮念觀世音、念念從心起、念念不



離心。

觀音經

何時かは世に人に心盡さん、人の上の人となりたき大願の眞一念、眼閉じて低唱禮拜、知らず俗念は去つて澄みゆく心、其清淨の耳へ、あら尊、菩薩お在ます彼方より、得云はれぬ難有き聲の聞こゆる。

金次郎思はず閉じたる眼細く開らさく夢の如く、見上る御堂の奥、燈明の影斜にゆらく金色の御姿、大慈大悲の御前に座したる老僧一人、脊屈みたる鼠の衣、椽に置きたる杖と笠。

衆生困厄をかうふり、無量の苦身に逼まらん、觀音の妙智の力、能く世間の苦を救ひたまふ、神通力を具足し、廣く智の方便を修して、十方の諸の國土に、

二宮尊徳

刹として身を現せざるごと無し、種々の諸の惡趣、地獄と鬼と畜生と、生老病死の苦も、漸を以て悉く滅せしめ給ふ、眞觀清淨の觀、廣大智慧の觀、悲觀及び慈觀、常に願ひて常に瞻仰すべし、無垢清淨の光りありて、慧日諸の闇を破り、能く災の風火を伏して、普く明に世間を照したまふ、悲體の戒は雷のごとく震ふ、慈意の妙なる大なる雲の如し、甘露の法雨を澍いで煩惱の焰を滅除し給ふ……。

其唱ふる音律の靈妙、凡に語るが如くして尊く廣き法の道、大慈大悲の無限を解き説く开も何と云ふ經文か、聞く程に思はず知らず金次郎は階段を上り、上りて、其老僧の傍らに座して、寂然。



森の木枯、落葉は寄て御手洗の蔭に、日は暮れた。

(十三) 國音にして讀誦

やがて老僧は、珠數を手頸に念ほごきて、人ありとも知らず。

『南無、南無。』

一卷を押戴きて懐ろへ。

『おゝいつか日の暮れたげな。』

獨言て、唯振返へれば、手を膝に端座せる少年の在るに。

『ほう。』

凡ならぬ眼に優し味見せて、胡麻盞の長き髻を撫しつ。

『聞いてぢやつたか。』

莞爾やかに。

『はい。』

金次郎は凝と其顔見上げる。

『ほゝウ。』

やをら立上りて、後何とも云はず管清き微笑に、破れ衣の袖直して、置たる笠と杖取て去らうとする。

『あの坊様。』

金次郎は其衣の袖を。

『何ぢやな。』

老僧は御堂の様に杖突て立止る。

『あの、あの今の御經、あれや何てムりまするか。』



「今の經文かな。」

「はい。」

「其れ観音經ぢやが。」

「は……。」

金次郎は訝し氣に。

「観音經でムりますと。」

「左様ぢや。」

「坊様。」

「ほう。」

「観音經私能く聞きもし亦憶へて唱へも致します、  
今の御經の御優しさ、其難有さは亦別でムりました、  
れや何と云ふ観音經で奈何云ふのでムりまするか。」

「うむ、いや變る事無いちや、前方が唱へる観音經普  
門品其れぢや、けどな雷愚僧は國音にして讀誦したまで、  
菩薩が大慈大悲の功德無邊、斯く唱へなば世の人の理解  
も容易かる、吳音の儘讀む前方、難有しとてむづかし  
かるにの。」

「あ、然、然様でムりましたか、道理こそ道理こそ、坊  
様、私御願ひがムります。」

「はてな。」

「其御經今一度御説き下されませぬか。」

金次郎懐ろより銅何干取出して。

「寸志でムります、御布施まで。」

「年齢もゆかしやらぬに、さて御奇特な事の、はい御受



致す、何今の經讀めとか、あゝ何遍なりとも。杖と笠元の處に、老僧は再び菩薩の膝近く座して、數珠さらさらと採ひ。

『其時に無盡意菩薩、即ち座より起て、偏に右の肩を祖

ぎ掌を合せて佛に向ひたてまつり……』飯泉の森の夜の寂、やぶらで高き讀經の聲、僅かに照らす御堂の燈明、老僧の脊後に正しく座したる金次郎の殊勝さよ、首うなだれて。

御堂の裏で梟が鳴く。

(十四) 墓前の讀經

栢山村善榮寺は二宮が家代々の菩提所、此れが祖父様

のとよ、祖母様のとよ、居士信女と彫みて列ぶ石塔の蔭、漸く低くなつた土饅頭の、此頃父も此處に隠れて、新らしき卒塔婆の、厭ふしい。

金次郎は働き終へて、讀書の其間、夜更曉方何時と云はず、訪ふては何くれと物語りて父が亡き魂慰めまつる、今日も日暮れて。

『父様、父様寂しふりましたよな、然し家ぢや母様も御機嫌、富次も肥りました、友の奴も能く云ふ言訊きます、私も一生懸命働いて而して種々書物も知りました、さつと、さつと家興して見せます。』

例の如、線返すやさしき言葉、四邊の樹々の風にそよぐも、利右衛門が魂の欣びに誘はれてか。



「あゝそれ、父様、今日は私、善い經文御聞かせ申します、其功德の難有さ、實に難有さ觀音經でムります、此頃飯泉の御堂で廻國の坊様から聞きました、父様御存じの觀音經彼れぢやムりませぬ、其訓讀、解知らずむづかしふ雷讀みましたとは違ひます、深い深い菩薩の御心、其儘を得たのでムります、私は此經の訓讀聞いて心廣ふおぼへました、父様、父様お聞かせ爲ます。」

墓前に座して合掌、賢しふも克く憶へた、耳に聞かて腹に會得したればこそ、たどりながらなれ普門品一卷の訓讀、自体聲高の金次郎は、墓所の夜るの陰を破つて朗々、知らず其身も羽化登仙。

離れて井戸の彼方、庫裡の小窓の障子は明いて、灯影

斜めに誰れぞ立つ。

讀終りて。

「父様、如何でムりました、何と左様御念じなされまし、讀みては私身の守護、解き味合ふては私心を廣ふ持まする、何と難有き經文でムりましょが……イヤ大分に更けました、お寝みなされまし、最早立歸ります。」

立上りて膝の土打はたき。

「父様、また参ります。」

世に在るまゝの懐かしみ、別れて墓所を出様とする庫裡の脇、未だ立つてありし小窓の主は。

「二宮のお子ぢやな。」

と出す圓い天窓。



世に望みムリます

「はい、これは和尚様。」

「いやも克く詣らしやる、茶など上げよに、寄らしやれ。」

「難有う存じまする、が最早大分遅ふムります。」

「何のおまへ夜は長いがな、些話さうぢや、まゝえゝわ

寄らしやれよ、金次殿。」

「はい。」

「さア、其處の戸明いてぢや。」

「左様なれば、鳥渡御邪魔致しまする。」

「あゝ、あゝ。」

(十五)

世に望みムリます

ぬくぬくとふくれた白き布子に丸き帯して少し猫脊の、

圍廬裏ほぢりつ。

「寒むうは無いかの。」

和尚は問ふ。

「ええ。」

と金次郎、貧しげな風采、筒袖の薄袷一貫ながら、人

物となる子の強い骨組、座して居るもきつと反つて。

「父が死にまして此方、私が家の心棒ぢやと母に云はれ

まする、氣が張つて居ります故か今年や寒いともおぼえ

ませぬ。」

「あゝ左様か、人は氣一ツ、ぢやてし却々ぢやな……」

其れは左様と金次殿や、今彼處で讀むでぢやツた經文、

ありや何ぢやの。」

二宮 翠徳



世に望みます

「あの、和尚様も聞きなされて。」

「此居間に在ても手に取る様、餘りの結構さに俺や知らず彼の窓明けて聞きましたぢや。」

「恐れ入りまする。」

「一体ありや何の經ぢやな。」

「あは、い、い、和尚様おなぶりなされちや私困ります。」

「これ、何云ふ、金次殿おまえ何でなぶらうぞい。」

「眞に御訊きなさりまするか。」

「恥入るが聞いた事無い經文ぢやて。」

「和尚様、ありや觀音經てムります。」

「ふひ………とも想ふたが、は、訓讀ぢやげな。」

「はい普門品の訓讀てムります。」

二宮尊徳

「さるにても念入つた訓讀、おまえ如何して解かれたか。」

「此頃飯泉の觀音様へ詣りました折、旅の坊様から會得しました、其坊様仰有るに、誰れも讀むは吳音てばかり、國音にしてこそ俗の耳にも清く入らうぞと、私は幾度か繰返し聞きまして、おぼろげながら彼の様唱へましたまて。」

聞く和尚は、寒き夜ごろに汗をおぼえた、己れ衣被て何十年、緝く經文何十卷、觀音經繰返す何百何十遍、が斯ばかりの理解を未だし、知るを得なんだ。

和尚は膝進めて。

「經文の心良う解つて、信念も固く。」

「はい、どうやら。」



世に驚かします

金次郎は莞爾と笑む。

「ふむ。」

和尚は手と手袖の中に交はして、金次郎が顔凝つと見詰つ。

「俺や此年齢、耻を知らしました……………金次殿。」

「はい。」

「おまえ突然ちやが、出家なさらぬか。」

「……………」

意外の問ひに金次郎は唯眼を視張る。

「如何ちや此寺渡さうか。」

「和尚様お冗談な。」

「けしからぬ、斯る言真面目ちやが。」

「彼の真に。」

「菩薩も照覽なさる。」

「なりやお断り致します。」

金次郎は言葉強く。

「私は世に望みムります。」

(十六) 留守のつもり

合点せば由緒正しき善榮寺の方丈、が金次郎は其れ程の事にさらに氣は動かさぬ。

金次郎は今、日に喰ふ物さへ足なけれ、立派に世に活きて居るもの。

小田原の町へ行く毎に城の石壘唯立派とのみ見上げて

三宮尊徳



は居ぬ、時に見る街道の大名行列唯美事とのみけるりとして居ぬ、我れも人なら、と氣は張強く。

有き觀音經の訓讀に信念を固うする、何の爲に讀み、難と確かに期する處がある、何の故ぞ。

然し如何せん一家の貧は、金次郎が苦戰奮闘の効も無く、其極点に達した。

時に新玉の春は來た、享和元年、金次郎十五の正月。

あわれ母子四人が秋も其れ着て、冬も其れ着て、一陽來復のけふも其れ其儘の襤褸着て何が芽出度い。

「な母様、今年はよい事ムりましょ。」  
「左様ぢやとも。」

母と金次郎は淋しふ語る、富次郎負ふて友吉は門邊に、村の童達の春遊び、いちらしふ眺めて立佇む。

折柄聞こゆる獅子神樂。

「やア來た〜。」

「神樂が來た。」

「源右衛門が門で舞ふ、皆行て見よ、來い〜。」

村の童は其方へ皆駆けて行く、友吉は見るより家に入りて。

「兄様、獅子が來ます。」

「お、左様な、太鼓がする。」

と利き耳立てた金次郎ははッと吐胸。

「如何爲ましょ母様……………」



『さいな、如何と云つて……』

正月の行事とて、此春は隣り村の若い衆が組立、戸毎が嘉例と舞はするは百文、断り云ふも身祝ひの投銭十二文が慣ひ、が、今二宮の家には十二文は置いて、破片半銅の其れも無いのだ。

貧しふはあれ代々の家柄、父親の在た去年の春迄は舞はせたものを、噫此春は断り云ふ其れも無いのだ。

友吉は脊中の弟揺り上げつ。

『兄様、家へ來たら舞はせるの。』  
無邪氣に問へば。

『えッ氣樂云ふぞ。』

と金次郎這慶事に叱るも辛らい。

笛太鼓は漸々近く、母は今さら針箱の掛籠抽出し、せめてもの投銭もと探して見るもあわれかな。

『母様爲様無い、戸を閉て留守の振しましよ、友吉あまえ戸棚へ入れ、母様隅に小さくなつて咳などなさらぬ様。』

金次郎はとつかは戸を閉て、戻り、思はず凝つと見合せる顔。

『詰つてはお可笑い真似も致します。』

『ほ、左様ぢやの。』

と頬笑ひ母が眼は潤ひて居る。

(十七) 風呂敷被つて



風呂敷被つて

村一番名取の笛吹き太鼓叩き、賑やかに打鐘して、獅子舞は今二宮の門邊へ来た。

村中家々、芽出度う迎ふべき初春の祝ひ事を、何事ぞ、在るにも在られぬ辛い思ひに、酒匂の洪水の襲ふても待つ様に、心も心ならぬとは。

友吉は富次郎負ふたまへ、戸棚へ、母親は台所に息を押へ、金次郎は風呂敷被つて座敷の隅にうづくまる。

噫、此態、知らず見ばおろかしとも想はふぞ。友吉の戸棚にガタリと音させれば。

「シッシッ。」

と風呂敷の中から忍びつ叱るもの苦るしさ、外には聲々。

「新年の御祝儀。」

「お芽出度う、祝ひましょ。」

「悪魔拂の獅子舞ひましょ。」

笛の音はのんびりと、太鼓は高く。

「はい御祝儀、獅子舞ひましょ。」

交代に呼べど、家内はひつそりと戸閉したまへ、何の應答もしない。

「次郎よ留守ぢやい。」

「然様と見へるな。」

「また廻ろぞい。」

「あいさうしよ。」

言ひ捨てヒューテンと囃子は其儘越て行く。

二宮尊徳







大いなる人の母

「友、見たかッたか。」

「あゝ。」

「我慢しろ、我慢しろ、獅子見たとて豪い者にやなれぬ、な母様。」

「其通りとも。」

(十八) 大いなる人の母

父利右衛門遊きて茲に足掛三年、第二人に母親助けて、金次郎は堅忍實行、年足ざる身を足る人よりも猶働き稼いで、何の彼の兎角して襲ふ災ひを克く堪へ支へて退けたが、又茲に新らしく、退けも叶はぬ悲しき事は起つた。何と云ふべき言葉も無い。

心盡すとしてさまでとは氣着かざりし、母親がかりそめの病ひの十日餘り其れが急に變じて一夜劇しき苦しみの明け方。

「水、水。」

と呼ぶに金次郎とつかは持つて來れば、首打振りて飲みも爲得ぬ様。

「母様。」

金次郎容易ならぬ氣に呼べば。

「あいよ。」

と其聲苦るしく。

「後頼みます、よいか。」  
息切りつ一言。



大いなる人の母

「母様、母様。」  
友吉の摺り寄せれば。

『あ……。』

とばかり僅かに其れのみ、此世の名残り、窪みたる眼は猶底に落て。

『乳よ、乳よ。』

と富次郎のせがむ時は、最早何の應へもなかつた。

實に享和二年四月四日、彼の尊徳、神と祀らるゝ人を生むだ、大なる人の母親は、枕邊に泣く三人の子の末を、迫り来る息に悲しく止めて三十六才を一期とし、利右衛門の後追ふて逝つた。

『乳よ、乳よ。』

二宮尊徳

富次郎はわけ解らず冷たき母親に縋り、友吉は兄の袖掴むでオイ〜と泣く、道が心強き金次郎も今は心挫け、悲哀は胸に満ちて、管欝り上げるの他は無。

夜は明けはなれ、朝日は照つた、然し三人の子は、たツた一人の母親の屍に縋つて泣いて居た。

漸くに金次郎涙拂ふて

「富次、富次、母様は遠い所へ行かしやれたのだ、兄が處来い、友何時迄泣いて居る、泣いたら母様戻らうか、泣くな、泣くな……。」

と云ふ頬にほろ〜と涙は傳ふ。

「友吉お前萬兵衛叔父様やら義作さん處やらそちこち走つて来やうぞ……。」



一言云ふては迫まり来る悲しき堪へ堪へて言傳聞かせ。

「それ涙拭いて早く行かうぞ。」

泣きながら出て行く友吉の後ろ影、金次郎は富次を抱

いて。

「よいぞく」

と子守唄。

「富次はよい子ぞ、寝んころり。」

謳ひながら熱つと見送り、亦ほろく、願へれば、た

つた一人の母親は死んで居るのだ。

(十九) 利に光る目

全然で數へて十六才、金次郎物心知つて何年か、あはれ其身邊は、貧と病ひと災ひと、而して茲に一年を隔て

父が死んで母が死むだ、と斯様である。

作り本にも斯ばかりの悲惨があらうか

如何に金次郎が一家の心棒とし働くと云へ母親が切廻

はしの力が預つてなる事、今は到底家支へてゆくべくも

叶はずなつた。

さらばと親戚がそれくの意見に、弟二人は母方の叔

父なる近き村の富七が許へ、金次郎は父方の叔父なる萬

兵衛の方に寄食して、徐ろに家の再興を企るべく定まり、

遂に栢山村代々の舊家も一時離散する事になつた。

此叔父萬兵衛、瘦た栢山にひとり肥へたる身代ながら、



あたぢけな性得に、吝いが萬兵衛か萬兵衛が吝いか、吝いと云へば萬兵衛と通り、萬兵衛と云へば吝いと通る、村一番の名代者なればこそ、同じ縁引き養ふにも、手懸りなは他家へ任せて、いつばしの役爲様金次郎を已が許へ、情けは口に慾充満。

父母に逝かれて、家を仕舞ふて、可愛弟等と右左り、身を寄せる叔父萬兵衛は然様した人。

然し家の跡方念無う濟ませて、叔父方に初めて寐た夜さ、ホツと大荷を下した氣がした、そりや一疾く家興さう氣に油断はならぬ、一先づは家の生活の苦勞はぬけて、弟二人の上も兎まれ安堵、其身も當分其身だけに、怠らす働けば可い事、如何に吝い叔父の許とて、其酷しさの

幸抱位ひ何の事無い、小さい腕にきのふ迄支へた生活の苦勞、其れに比べて何の事無い。

翌る朝疾く萬兵衛の言渡しに諄々と這度の世話振り、普通ならぬ厄介繰返して、人一人一月の食料入目は云々。

「叔父なればこそ引受けもするぢや、よいかな、確固と聞け。」

と念推して。『其氣で思入れ働かう』

デロリと見た眼は、唯利と云ふ文字に光つて居る。

(二十) 誰れが油

利に光る萬兵衛の眼は、怠り無く働く金次郎を、猶彼れ



誰れが油  
 此れと恩を被に、一刻一秒の緩みもなく追使ふ、が、云  
 はるゝ儘に、無理もはい邪見もはいと、終日脱がぬ泥草  
 鞋、熟つと忍むて居るものゝ、亦想へば、家を脊負ふた  
 きのふの苦勞こそ無けれ、牛馬か何ぞの様に一向きに慾  
 の鞭あてられる骨折は却々、而して一言目には厄介者と  
 口辨、けれど、けれど誰れが愚痴云ふ對手も無い、え、  
 男なら笑つて働けまゝとばかり、事成さう程の人の元氣  
 は道が別であつた。  
 樂しきは夜々更けて密と臥戸に學びの道、例の讀書三  
 味を何よりとして居た。  
 出来得るだけの日の稼ぎ、執念さ叔父の合点する迄、  
 例の事濟ませて或る夜。

『では御寐みなされませ。』  
 と行儀正しく手をつけば。  
 『うむ、翌朝亦早うせにや不可ぬぞ。』  
 と其光る眼、何時ちやとて誰れより先きに起るものを、  
 あんまりとは想へ。  
 『はい、はい。』  
 温順に應答て臥戸に入り、何であらうと此れからが自  
 己が世界と、行燈の前に整然と座して緋く書籍、讀入り  
 ては晝の勞れもいつか忘れて、却々に眼は冴へ、味合ひ  
 ゆく章句に思はず膝打叩きて、はつと奥の方へ心兼ねる。  
 折柄背後の板戸ガタリと明けて、萬兵衛は入つて來た。  
 『金次、未だ寐ぬのか。』



『はい。』

『何ぢやいそりや。』

『はい、まだ叔父様に申上げませなんだが、夜々寝ます暇、少しづつ、書物學むて居りまする、何卒御許し下さいませ。』

『ふん、書物讀む、何の爲にな。』

『はい、人らしい者になりたい爲。』

『えッ生意氣な應答する、人らしふも何もあるか厄介者

が……蛙の子は蛙なりや可いわい、書物讀んで何になる、廢せ廢せ。』

『……………』

『何ぢやい妙な面する、よいか詩を作るより田を作れち

や、書物讀む高慢があるなりや此言葉考へて見ろ、まア第一此行燈の油誰れがのぢや、いやさ誰れが買ふとく油ぢやよ。』

金次郎は俯向いて、何も云はぬ。

『此れチト無益を無益を……うむ無益な油使ふて、

無益な夜更しして、翌日働く軀にたるみが来るは、如何

に叔父處の飯ぢやて氣樂に喰ふない。』

云ひ様に萬兵衛は、金次郎が膝の書物投げて、行燈を

吹き消し。

『此先き寐る時、行燈点ける事ならぬぞ……厄介者がッ。』

(三十一) 行燈へ襪被て



あらしく板戸閉て、萬兵衛の奥に入つた後、金次郎投げられた書物手探りに片付けて、云はれぬ悲しさに蒲團被つて泣いた。

貧乏を續けた——兩親に逝かれた——同胞と別居する家も無い身の——冷たい叔父に追使はれる——せめて僅かに寐る間を割いての讀書の其れに迄斯かる事になるとは、如何にとて、如何にとあんまりだと、道がの堪へ性もめちやくに泣いた。

金次郎は艱難と云ふ事に馴れて居る、如何なる辛苦も亦厭はぬ、が、此讀書の叶はぬとの一事ばかりは、此儘に堪へ、黙して過ぎ得ぬ。

爲に何で晝の働さが鈍らうぞ。夜に書物讀む樂しみあ

ればこそ人よりも猶働かう勵みも出様、無益な油、其れには心着かなんだ成程性得吝しい叔父様の其谷、然様あらうか、ならば此後叔父様の油使はねば可からうぞ、其れで晝の働さの鈍らねば可からうぞ。

工風苦面爲様と、何程せつない思ひ如何に爲様と、家の再興、猶其上に望むべき想ひのあるもの、勉學のみはせずには居られぬ。

と金次郎は其後苦慮様々、漸くに一工風した、其れは村内仙了川と云へるの堤端に誰れも足踏入れぬ荒地あるを見出し、其雜草を刈り開いて此處に油菜を植附け丹精した、云ふまでもない叔父方の働さの間は欠さぬ、小作もする晝休み茶休みの間を其方に働いて、其一心は何



時か美事何歩かの菜畑を作り上げた、而して收穫た種子を市に賣つて油に代へ、漸くに學びの文字を照すべき料を得た、が其れとても、叔父が知らば何ぞ亦難かしかるべしと。

あわれ、自己が汗に得た丹精の油燈して、働さ濟ませとの勉學を、心兼て萬兵衛に知られぬ様、灯りや漏れんと行燈に襤褸被せて、辛ふじて學びで居た。が遂に亦或る夜、其れを叔父は知つて、聲震はして怒つた。

「汝、何故癡さぬッ。」

「はい、相濟ませぬが外ならぬ身の嗜み、決して『晝の働さ怠る様な事致しませぬ故。』

「え、云ふない、癡せと云ふたを何故癡さぬッ、汝俺を莫迦にし居る、許さぬ油何んて使ふた。」

金次郎は腹に得意の笑があつた。

「あの叔父様、此油は家のちやムりませぬ、お叱り受けて此方、並ならぬ御厄介になる身の、已が勝手な眞似に油使ひますは相濟まぬ事と存じまして、此れは此頃仙了川の荒地へ油菜を作りまして、而して得たのでムります。何、汝が作つた。」

「はい。」

「誰れが其麼もの作る暇を與へた。」

「暇は戴きませぬが、皆様と同様に晝休み致します間、毎日少しづつ丹精したのでムいます。」



と斯様云ふた時、金次郎何とも云へぬ涙が潤ひた。  
「うーん。」  
萬兵衛は其顔を凝つと見た。

(二十二) 其まゝ草鞋

道が無情冷酷の萬兵衛も斯程の熱心には動かざるを得ぬか否彼は茲に亦何か自己が都合を思案したらしい。  
「其麼なに讀みたいか。」  
「はい讀度うムいます。」  
「なりや書物讀む事許さう。」  
「は。」  
意外の言葉に金次郎は思はず其顔を見た。

「油を己が作つてまで讀みたいもの、讀ませぬは情けて無い。」  
さも慈愛らしく云ふ、口は調法なと金次郎は腹にお可笑く。  
「はい。」  
「其代り許すには許すだけ、お前ちやて其心に禮せにやなるまい。」  
「そりやもう許してさへ下されば、叔父様御心に叶ふ様致します。」  
「うむちや此上働くか。」  
「働く事何でもムりませぬ。」  
「諾、なりや此れから今迄の寐る刻限を一時延ばして其



れだけ猶夜仕事しやう。」

「容易い事でムりますとも。」

と金次郎氣も無い様に答へたものゝ、日毎子に寐て寅に起る勤めの其上、猶一時の夜仕事は限りある人の躰の、其餘りを勉學爲様など如何て叶はうか、然し叶はぬとて左様すればこそ晴れての勉學も出來るなれ、よし寐られぬとても、と心は固く。

「叔父様、それなれば叱らず書物讀ませて下さりますか。」

「む、許す、其代り居眠むりなどすりや承知せぬぞ。」

「はい。」

斯くして漸くに晴れて讀書する事が叶つたのだ。寅に起きての泥草鞋終日、夜は草鞋作りに繩綱ひに子

の刻まで、猶其上を一時の仕事、而しての後を書物讀む或る夜は實に書を置く時鶏が啼いて、直ぐと其儘に草鞋を穿いた。

燈の光り、窓の雪何すれぞ、此苦學？

(二十三) 休む間の録

母親の逝きし十六才の年、萬兵衛の食客となつて、十七、十八、十九と、越へて足掛五年、其利に光る眼の下、彼の如き働き、彼の如き苦學して、金次郎は茲に廿才の男となつた。

其五年間に於ける働き苦學、然も其餘り、人が樂寐する休日、茶休み並休みを利して渠金次郎は、實に家再興



の資を作つたのであつた。  
 食客の厄介者のご口癖に云はるれ、叔父が家に對する  
 渠が働きは奈何であつたか、其食扶持や入目が何程か、  
 盡して餘りある云ふ迄も無い事、此れが何で食客であら  
 う、何て厄介者であらう。  
 亦人の休むべき間に休まで得た其家再興の資とは如何  
 なる物であるのか、  
 其れこそ實に尊徳二宮金次郎其人が、神となる礎とや  
 云はん、荒地の開墾、勤儉推譲、報徳主義、其第一期を  
 成し得たのであつた。  
 叔父が無情に止められた讀書の燈り、其料を得べく工  
 風盡して、人の休む間を已れば鉄離さず、仙了川椽の荒

地の開墾、而して僥倖にも並ならぬ油種子を收穫した、  
 其益と興味とは番に其讀書の料にのみ止めて置かぬ、進  
 むで渠は不用の荒地を調べた、亦例の洪水の爲め用水掘  
 節の流出して主無き地となりたるを及ぶ限り手を盡して  
 開墾した、で其地へ植へるに邑民の打棄た苗など心して  
 拾ひ集め、丹精に丹精をした。  
 で其當初に僅かと云へ一苞の實りを見たのであつた、而  
 して其得た一苞を種とし、猶拾ひ集めた棄苗、根克くも  
 丹精して耕作した。  
 知らず五年の後の渠は、其丹精に成つた苞は積むで、  
 亦其得た何程かの田地は、當然權利ある立派な開墾者で  
 あつた。



且渠は時に得た物を賣りて金に代へ、此れを村内の子  
 無く老ひたる人、親無き憫れなる子、亦病ひに藥得るさ  
 へ難儀と見る痛はしき人など見れば、自己が悲しみ  
 多き身の情け深く、有る程の物それくに投げ與へて慰  
 めやるに、其人々の欣びの聲は、自然渠をして凡ならぬ  
 人とするのである。  
 宜なる哉、後年全國に普ねく報徳の大いなる主、農事  
 家計の仕法分度、經濟の極意を世に擴くする、諄く云ふ  
 が、神となる身の違ふたものである。  
 さて金次郎は一日叔父の前に、改めて長き五年の養育  
 の禮を述べ、亦其蓄へ得たる再興の材を打語りて、茲に  
 暇を乞ふた。

時に萬兵衛は道がに莞爾として其乞ひを入れ。  
 「うむ然様か、然様か。」  
 と意外にも、其行を賞揚しつ。

二十四 嘗て無以笑顔

萬兵衛性來の無情冷酷、然し鬼ては無い人である況ん  
 や叔父である、金次郎が五年の勤勞に、積れば萬兵衛と  
 して抄からぬ益を得て居る、殊に茲に渠は暇を乞ふに際  
 して、自ら後を計るべき資材を作つて居る、云つて見れ  
 ば、恩を被に預つて五年の長きを思ひのまゝに使役して、  
 何物も興へて渠より暇を乞ふ事其利に光る暇から見れば  
 實に壺に入つた寸法である、亦鬼てない人である叔父て

二宮尊徳



あると云ふより云はゞ、渠が獨り得た材に據つて家再興の緒に着く事欣ぶべきが當然である、何れ共苦情のあるべきで無い、萬兵衛は金次郎來たりて五年間、嘗て無い笑顔をした。

『唯だ善い人だと云ふばかり甲斐性無し困り者だつたお前親父とは些違ふて、イヤ却々見處があるわい、一本立、然様とも、然様なくちや叶はぬ、富七が處の弟二人も引取つて腕一杯やつて見様ぞ。』

『はい、やつて見ます。』

『よいか、自己が身柄も忘れて、施しちややれ何ぢやと入らぬ真似して、貧乏しつゝけて死むだ親父の跡慣うない、うむ、俺を慣へ俺をよ。』

『はい。』

『叔父ぢやから云ふ、今の世は金の事ぢや、學文や理屈ばかり知つて腹空す阿呆になるない、人が蔭口何と云はふと、痛い事ぢや無し金を作らうぞ、其事ぢや。』

『心懸けます。』

『よし解つたか、亦叔父が恩も忘れるな、時には來て手

傳はふ。』

萬兵衛は萬兵衛らしき言葉に、渠の將來を諭せば。

『何かと難有い御心着け、御手傳ひにも是非來ます。』

金次郎は令暇するに際して、反する意思も何逆らはふ

必要も無い、既に報徳の心、厚き思想に動かねば、嘗て

ふまゝに受けて。



懐しくてならぬ

「其れでは叔父様。」

「確固やれ。」

「左様ならば。」

芽出度くも家再興の一步、金次郎は叔父方を出て、五年閉ざして其儘の我が家の軒へ立戻つた。

(二十五)

懐しくてならぬ

戻りて見れば、椽は雑草に埋れ、柱板敷は汚れるに任せて、軒は歪み戸は破れ、何處も彼も蜘蛛の巣に煤に得知れぬ虫の飛び狂ふ、唯見れば狐狸の棲家とも怪しまれるのであつた。

が金次郎には、其汚れた柱も何も彼も一とし懐しくて、

懐しくてならぬ、嘗ては此柱に寄りて父が好きの酒に機嫌の顔、母が能く座せしは此邊りかなど想ひやれば、淋しけれど悲しけれど、云はれぬ懐しさに無量の感が起るのである。

病魔に父母を奪ひ去られ、已れは鬼の膝下に辛苦の五年、茲に立戻つた其心持は。

其顔にかゝる煤拂ふを、其身其家が再興の端緒とや云はん、旋て友吉富次郎を呼戻して亦懐しき同胞が手に草を刈、家を清め、而して佛壇に燈明を上げ、第二人を後方に金次郎は念佛一唱。

「父様、母様、金次郎立戻りました、友吉富次郎も呼び戻しました、此處に揃ふて居ります、此れからでござり

二宮尊徳



解してくてならぬ

ます、此れからでムります、今日こそ晴れて父様母様の  
前で、同胞三人が誓つて置きます、叔父様方に五年の  
御厄介、其働きの暇に私手で作りました一苞の種子は、  
猶荒地を丹精の田の材となりまして、只今は僅ながら私  
の田地となりました、此れからは私共彌々一生懸命に心  
を合せまして家起します、何卒御安心下さります様  
茲に改めて申し上げます

云ひ終りて、弟等の方を顧み。

『よいかお前等、確固とやろぞよ。』

『はい。』

『はい。』

と答へつ二人の弟は佛壇に向ふて。

「兄様の云ふ言訊きまして、一生懸命働きます、なア  
富次。」  
友吉の云へば。

「父様、母様、屹度働きますから、安心して下さいませ。」

三人の子が手に供へし生花、線香の煙りは嬉し氣に列

ぶ子等の肩の邊り傳ふて西の方へ。

富次郎が打つ鈴の音。

(二十六) 莫逆の友

二宮家は再世した。  
酒匂川の水は猶夏秋に堤を破つて、村に災害を興へる  
けれど、二宮が家の柱はもう揺るぐ事でない。

二宮尊徳



金次郎物心覺へて絶へぬ辛苦、果を五年、冷酷の叔父の許にあらむ限りの働さ、如何に其間に觀た世は人は、泣きたい時笑顔して過ぎつ、一方大慈悲の經の功力亦學びの道に練つた心は、世に向ふては何處迄か強く、人に對しては飽くまで柔しい、亦其物言ふ聲の高く、見る軀の堂々とした、今を血氣の、何うでも秀れた男である。寸暇に握つた鐵の汗に開墾した荒地、若し渠が手を着けなかつたなら、いつ迄か虫が宿りの草叢であつたらうを、踏まれた道の捨苗を撫育して、美事田を作り、此れに得た何干を、時に投げて不憫な村人に情け盡し、亦其穀は積むで汚果た我家の柱を興した、其普通ならぬ心入れは、知らず人の心の慕ひ寄る處となつて、渠に對す

る望みは重く、金次郎様は豪物——凡人でない——の聲々は、狭き栢山に溢れて、隣村は隣村へと、恰も酒匂の洪水の漲り渡る様響いた。

金次郎は此處等一番の男である。

茲に栢山村に二宮家と共並びての舊家に小澤某と云へる大農がある、其家の別懇に鶴澤作右衛門とて、小身に起つて代官を経後に勘定奉行と迄昇進した才物が居た、金次郎小澤家との往來に時に來會はせる鶴澤と相知る處となつて、彼一語是一語投合する意氣は、何時か莫逆の友とし交はるに至つた。

元來金次郎に媚は無い、亦鶴澤の友とし交はるに社祢着けた勿体は無い、金次郎の鋤鋤と鶴澤の大小は、對し



莫逆の友  
て克く語り、興深く士農の道を互へて居た。

『の、二宮。』

鶴澤が云へば。

『何ぢやい。』

隔てない膝組、くつろげた心裡に亦禮ありて正しく、  
一層美しい。

『古い事、キ印金次の縛名聞いて村の奴莫迦云ふと思ふ  
て居たが、どうぢやろ、今は此邊どの村ぢやて足下を獲  
めぬ者もな。』

『何云はしやるはッはッ朋友に世辭は可ふない。』

『誰が足下に世辭云はふ、俺や交際へば交際ふ程、足下  
を知つて慕はし。』

『困るな、然様水向けられぢや、栢山に水は眞ッ平ぢや  
がはッはッはッ。』

『イヤ洒落れるのはッはッはッ。』

『何が唯代々の家掃除して戻つたまで、見るからに此貧  
乏ぢや、意氣地もな。』

『貧乏は其れや知つて居る。』

『此れや御挨拶ぢやな。』

『ぢやて足下の言ふ通り。』

『然様ぢやて、チト愛嬌が無い。』

『栢山に水は眞ッ平ぢやろ。』

『はッはッはッはッ。』

『はッはッはッ。』



(二十七) 仕法分度

「然し二宮、向後の望みは什麼ぢやな、さぞあらう。」

「む、却々ありますうが……。」

金次郎は莞爾として答へる。

「語れな。」

鵜澤は膝を進める。

「が、百姓の望みや知れたものよ。」

金次郎は仕事終ふて、鵜澤は役目済ませて小田原の脚

躑よき夜ごろ、訪ひ寄りて様々語る。

小弟の富次郎は兎角して病身とよ、早臥戸に、次男の

友吉は彼方の隅に草鞋作る、亦金次郎も語りつゝ膝に細

絢ひの手を休めず、其脇には嗜みの書籍の重ねてある。

「貧乏村の栢山に、貧乏な二宮の子の俺がどうしやうと

て及びもせまい、と思ひはすれ、然し俺や至誠と云ふ字

のゑらい材源である事を知つて居る、國郡人家自己、至誠と

云ふ文字で皆動く、而して人各自々分を知つて盡すぢ

やね、俺や此れから俺だけに盡したい、先づ興したいと

想ふた家興すだけの道は開いた、家興して了ふたら村の

爲に働きたい、村人の爲に盡したい、栢山村の繁昌が今

俺が分の望みぢや。」

「あゝ其れは頼み多い事、ぢやが此瘦村活さうは却々、

容易の事でない、足下は何麼云ふ法を執るな。」

「左様、知る通り俺や叔父萬兵衛が方に働きの暇、捨て



仕法分度  
 た地面捨てた苗拾つて丹精した其出来秋の一俵が五年釘  
 して過ぎた家の戸明ける端緒でムるが、然れば此れを俺  
 が仕法とする、一に荒地の開発、二に分度を定めて村の  
 懐ろ整理する事、其れから怠けて貧なる者を戒め、働い  
 て窮する者救ふて勤儉推奨と云ふ事勵ましたい。』  
 『成程、立派な事、其分度と云ふは。』  
 『分度とは、分は自然に授かるもの、度は此れを支へて  
 身の泰さを計るもの、分は天の下す處、度は人の爲す處  
 例言へば春苗を植へて夏此れを育て、秋收穫て冬此れを  
 蓄へる、即ち五穀に對する春夏秋は分、其れを蓄へる冬  
 は度、开處て人の生計、村の經濟も此分度を用ひねばな  
 るまい、村の収稔人の貯へ先づ十年を平均して四ツに割

り、其三分を經費に一分を用意に取置く、左すれば其  
 取置いた一分は、村で云へば年々水害の救助ともならう  
 戸々として云へば病難其他何なり立派に補ひ得様、若し  
 幸ひに年に水害も無く、家に病難も無かつたら、村に人  
 に豊かな材となつて、時に其材を投げて新たに事も起せ  
 様、亦同情すべき人の爲に盡しもならう、俺や此法何處  
 迄も立てたいと思ふて居るが。』  
 『うむ。』  
 『容易な様で難な事、難な様で容易な事、な心一ツ、其  
 れ至誠ぢやが……。』  
 『うむ。』  
 鵜澤は感じ入つて訊く。



(二十八)

妻を迎ふ

其仕法分度を身に究め家に起し、懸ては村に亦國にも  
盡さう金次郎の強固なる意志は日を遂ひ月を重ねて歩を  
進める。

一苞に興した二宮が家の柱に、貧に泣く者處法に苦る  
しむ者の寄り集ひて、金次郎の教へを仰げば、欣びて懸  
ろに此れを説き諭す、其美しき感化は、太郎作吾七湖十  
とて村で毛虫の悪たれさへ、何時か打つて變つて殊勝に  
も働さ出し、而して可笑や猿真似ながら、村の爲人の  
爲盡さねばならぬなどほざく。  
栢山村は活返つた。

「はらう」

が、茲に亦如何詮様も無い悲しむべき事が出来た、其  
れは小弟富次郎の病身に加へて襲ふた酷い病魔の哀れ渠  
を奪ひ去つた事である。  
時文化四年六月六日富次郎僅かに九才の壽金次郎に似  
て賢しき質なりしものを。  
返らぬ事なれ、早くに兩親亡き身の、たつた三人の胴  
胞の其一人を失ふた事、善榮寺に建てる新らしき卒塔婆  
に手向けの水して、金次郎は友吉を振返り。  
「貴様、病らはぬ様に爲様ぞ」  
淋しく言ひ合ふのであつた。  
然し是非も無い父も母も弟も皆各自々の壽、今は殘



者を諭ひ長く、何ぞ人らしき事せうこそ望めと、友吉  
 を教へ育てゝ。  
 金次郎は新田の開墾、事あらば相談の座に至誠の法を  
 説き、一心栢山の功績を上げ様に勤める、他は無。い。  
 十八の男十四の嫁を取る村の慣習から云へば遅いとも  
 云はふが、金次郎は人らしき人ともならず未だな事と人  
 の薦めも退けて居た、が、村の厚き信用に渠の良き妻迎  
 へて美しき家庭調へる事迫まる聲々高きに、何れ無く  
 て済まぬ者の意地張りては否まず、茲に隣村堀内村中島  
 彌兵衛の娘さなる者を娶り、朝に夕べに花ある笑ひの  
 優しき禪姿、一層二宮家の榮へ見る事となつた、此時金  
 次郎廿三才である。

僅かと云へ得た田地何歩、元來由緒正しき家柄、日々  
 村の信用は厚く、妻さへ迎へ人とし全き身となつた、幾  
 年貧を呼ばれし二宮の家は、福こそ宿らむ。  
 嘗てキ印金次など、後ろ指せし者の、見よ、見よ。

(二十九) チト面倒を事

芽出度く越へて一年、春の夕べ。  
 瀬戸の刎釣瓶キチと音させれば、ひらくと野良  
 着の肩へ、散りて止まる梅の花、田の草蒨の足洗ひなが  
 ら、何かもの想ふ金次郎の、脊後にそつと立つて。  
 『二宮、今田から戻りかい。』  
 短き羽織平袴、鶺鴒澤作右衛門は頬笑みつ言葉かける。



チト面倒な事

「よ此れは鶉澤氏、役向きの歸りかの。」

「此梅美事に咲いたな、足下の肩に花片が散つて居る、風情ぢやな、何ぞ思案顔して一句あるか。」

「は、」

金次郎は打笑ひつ。

「一簞食一瓢飲在陋巷、人不堪其憂、回也不改其樂、賢哉回也……俺や今偶と此章を想ふて居た、趣き深いな。」

「はッはッ顔淵は吾が友なりしよ。」

「鶉澤氏も譽れぢやなはッは、」

「其れや然様と顔淵子、今日は足下に眞面目に告げる用が出来てな」

「いやそれで見へられたか。」

「左様。」

「はて何の用か。」

「チト面倒な事での……何悪い便りでもないがな。」

「ふむ、まア何しても其方へ行て聞かう。」

「金次郎は幾年磨いた赤黒い脚洗ひ終つて、鶉澤と共家に入りつ。」

「さの掃除はよいか、御客様ぢや。」

「宜しふムいます。」

妻女は襟脱しつ。

「此れは鶉澤様の何時の間御出なりましたかちつとも存じませず……。」

「イヤ瀬戸から罷りました、兎角遠慮の無い事。」

二宮尊徳



「其れはま恐れ入ります。」

主客はやがて六疊の椽先きに、障子明けて未だ暮れ惜しむ春の夕空眺めつ。

「すつかり季候も好うなつたな二宮。」

「左様もう櫻ぢやな、時に何う云ふ用向きかな。」

「チト面倒な事……。」

「はてな。」

「金次郎は八の字寄せる。」

(三十) 武家の整理

「足下、小田原の服部十郎兵衛殿を知らう。」

「御家老の。」

「左様ぢや。」

「其れが……。」

「其服部殿から足下への頼み齎らしたぢや。」

「えい、意外な事、何ぢやて。」

「あまり高聲でもならぬ話ぢやが、服部殿は家老の上班食碌千石とある大身ぢやが、代々の驕奢に一番を司る身が出入其處此處に千金を越へる負債となつての、あわれ今破産せにやならぬ時の來て居る。」

「其れはきつい事。」

「乃で服部殿苦慮やる方なく、其果偶と足下が噂を聞か

れたげな。」

「此れや困る、何の噂……。」



「一苞の穀に家の再興、二宮家の今日ある事其れ分度仕法の事、豪いものと聞かされてな……。」

「は、何を云ふ。」

「まア聞かされ、此頃俺へ種々と問はれるぢや、乃て俺や足下の事知れる儘思ひの儘語つたが、服部殿膝打つて邸の整理頼まれまいかと先づ斯様ぢや、近附きなら乞ふて見て呉れぬかと懇ろの頼み受けて来た、奈何ぢや足下迷惑ぢやが悪い事でもなかる、頼まれて見ちや……。」

「頼澤氏まア何を云ふ。」

「何を云ふッて、整理の事頼まれて見ちやと云ふのぢやが。」

「俺や百姓ぢやよ。」

「さ、然様云はれちや困る。」

「ぢやて百姓は何處迄も百姓、村の爲さへ未だ何一ツ成りもせぬに、あらう事か百姓の身が武家の整理、他に人も澤山あらう、話が違ふ、置かしやれ頼澤氏。」

「いや足下の事、左様云はふとは覺悟ぢやが然し他にあらうなら猶更、其中に百姓の足下へ折入つて服部殿の頼み、見込むての事、實俺と共訪ふても乞はふと云はる、ぢやよ、其れする事足下の云ふ報徳の意に違ふかな。」

「困るな……。」

金次郎は腕を組む、頼澤は其顔見詰めて。

「行つてやらしやれ。」

自己が頼みの様に云ふ。



武家が頼みに斯ばかりの用乞ひ寄られる、秀れたる力のあればこそ、さても天晴れの良人よと今更に嬉しい、妻女はもう肩身の廣く何故早く御受なさらぬかと、其れが焦れたく。

「ね、貴郎。」

と思はず言ひ寄れば、金次郎其れには答へず。

「鶴澤氏折角ぢやが、其事俺の分てない、御断りする、

服部殿へ宜しくな。」

屹度云ふた。

(三十二) 五年の留守

服部十郎兵衛はさらに人を代へて幾度が頼み越した、

鶴澤は又来る度に根克くも迫まる妻女は最早服部の使ひ鶴澤の來ると云へば、良人の断り聞くと辛く、訪ふ人への氣の毒さに座にも得堪へぬのである。

今日も又鶴澤の來て、莫逆の友も遂に疝癪の体だ。

「なア二宮、俺が困る、知る通り俺も服部殿と足下の仲

人に生れたぢやない、些は務めもある身ぢや大体でない、

如何でも訊けぬと云ふか。」

強く云つたが、又。

「朋友の顔立て、訊いて呉れるな。」

乞ふ様に折れて云ふ。

「うひん。」

金次郎は未だ苦い顔。



「訊かれぬか。」  
鵜澤の聲は高い、妻女は傍らに氣が氣て無く、はら

くとする。

道が金次郎も茲に至つて、遂に動かざるを得ない。

「左までに言はれる、小田原からは幾度かお使い、俺如  
き者其れ程に見られる、やれぬ迄が御受せにや濟ひまい  
か……。」

靜かに云つて。

「諾し、出来るだけやる。」

確然と應答へた。

「其れや眞實。」

「もう御念なう。」

鵜澤はほつとした、妻女は猶更重い荷卸した様。

「いや其れや効ある事、服部殿御心配、早速に御傳へし  
て來様、諄いが宜しいな。」

「御受する以上何二言申さう、翌日にも服部家へ罷り、  
確かに其命受けますわ。」

「忝じけない。」

「いや長い事氣を揉ませた。」

「何の。」

鵜澤は漸く意を得て、欣ばしく立歸つた。

金次郎承知する以上猶豫は無い、鵜澤の立歸るや直ぐ、

妻女さの弟友吉に向つて。

「お前等鵜澤氏との話聞いてあらう、身に過ぎた事ちや



が今日迄彼れ程に云はれる、よくくなればこそ俺如き者にも頼みあさる、御受けする上は仕負せねばならぬ、何分千石の御大身なり、聞く處では却々困難い整理、其家安泰に計らうは鳥渡なる事でない。』

金次郎は言ひ懸けて暫時黙し、其顔見詰むる妻と弟を凝つと見返へして。

『服部殿邸に行かば、先づ尠くも五年は助けぬな、お前等さつと留守しやう。』

と言渡す。

『あの五年。』

妻は、夫が普通ならぬ身の勤めとは云へ。さりとても餘りに長しとの面持。

『御出の儘、其間御立戻りなされず。』

あづくと云へば、友吉も共に嫂の心想ひやるか。

『お邸に詰めたまふ。』

と兄が顔色親ふ。

『勿論ぢや。』

應答は強く。

『代々の御家柄、其寢せ起しの請合、武家の邸を百姓の俺が支配する、五年で濟めば上々の首尾、戻らうなどの暇は無い、友吉些確固と爲様、さのも解つたか。』

『はい解りました、御苦勞な事に存じます。』

『お留守中確固とやります。』

妻と弟は、仕負ふせた五年の曉想へば、亦さぞと望み



もあり、樂しみ深いに健氣の應答して、改めてさきのは。  
『斯様して友吉殿のお働き、及ばすながら私も御手傳ひ  
致しまする、決して家の事御心配なされぬ様、五年の御  
首尾 樂しふ待まする。』

『む、然様なくちやならぬ、其れちや翌日の朝留守中の  
事手配して萬任かさう……お前等は二宮家を寢せ起しの  
支配ちやはッはッ。』

金次郎は心快く笑ふて。

『然しナきの、友吉、人は想ひも寄らぬ事の來るものぢ  
やな。』

(三十二) 衣は綿服の事

『それぢや行て來る。』

と一言妻と弟へ五年の暇、其翌日金次郎は城下へ出て

服部の邸訪へば、豫て婢僕は主人よりの沙汰に、其れこ

そ平常ならば武家の邸へ百姓の、勝手元へ廻はさうを、

取次は式台へ手を突いて、小倉の帯の胸高、裾短かさ赤

縞の布子に、丈短かい羽織被た此客、凡ならぬ人物と迎

へて、粗勿なく客間へ案内すれば元來金次郎の憚りなく、

先づ見廻はす座敷の床の間 違ひ棚、軸花瓶置物の風流

思はず眉に筋寄せて。

破産せにやならぬと云ふを此れちやもの……と心密か

に想ふ時、襖靜かに排けて黒羽二重の紋服、年齢四十ば

かり、服部十郎兵衛立派なれども面瘦せて、見るからに



衣は縮服の事

傾く家の主人かな。

禮厚く金次郎を迎へて。

「よくこそ御承知下され早速の御出向き、難有き事に存

ずる、委細は鶴澤より御聞き及びの筈、改めて申さう迄

もない、何分とも頼み入る事。」

服部十郎兵衛あわれ千石の大身も、斯かる時面目を保

つべきも何も無い、只管に乞ひ絶る。

「諸事鶴澤殿より承はり居ります、承知仕ります上

は御家の泰さる計り事、きつと致します存念、が御前、

御家内外の事悉皆私にお任せなりませうや否。」

「御言葉迄ない、何一言申さう。」

「私想ひのまゝに。」

「此方よりの願ひ。」

「然れば今日より五年を期して、御家お預り致しまする

御前始め私申す言一々お用ひ下さるな。」

「御念は無用。」

「其れぢや只今早速に申上げる。」

「何卒。」

「御前。」

金次郎の聲は殿かに高い。

「御家にあつて其御衣服は何事でムる、亦此御座敷の眼

に入る物一々無用と存する、探ゆ幽の軸を客間に御自慢遊

ばす時でない、大祿を食みながら御家廢滅の危機に陥り、

君公への不忠、御身御先祖への不孝些お思召さねば相成

二宮尊徳



衣は綿服の事

ませぬ、先づ衣服は木綿にお改めの事、無用の物總て御  
取除きの事、亦御食事に對しても私お計ひ致します、  
宜しうムりまするな。

『仰せあるまゝぢや。』

『乃で御負債の額、千金餘と承はる、確とお調べは千何  
兩とムりまするか。』

『積りて千三百兩……。』

答へて十郎兵衛今更に頭を垂れる。

『宜しふムる。』

金次郎は安堵さすべく力強く云つて。

『早速債主共集めて、私法立申入れまする、就て亦向  
後御家お預り致す限り、お雇ひの人々へ申渡す事のムり

まする、若し取用ひねば私處分仕る。』  
『よしなに。』

(三十三) 餘金三百兩

金次郎 一間に婢僕一同を呼集めて、向後五年指揮の  
下に一言否まず、粉骨働くべくや若し然あらぬ者は速刻  
に暇を取るべし。

『如何か。』

と厳しき問ひに、元來家の子の主思はぬはなく、一齊  
に。

『御家の爲一心御指揮の下に働きまする、皆違背ムりま  
せぬ。』

二宮尊徳



と健氣の答へ、然らばと改革の仕法日常の勤め振り萬  
 の事懇ろに諭し、其分度にか計を立て、亦債主等を集せ  
 て此れを説き、年賦返却の法を定め誓つて行ふべく約す  
 に、債主何れも心快く諾して去る。  
 金次郎斯くて、身は内外の監督に油断無く婢僕より疾  
 く起出でて遅く寝ね、竈に風呂に薪の焚方、庭掃き様の拭  
 掃除にまで、無益無く手落無く、亦時に主人に代りて來  
 客の應對、時に自ら主人の供となつて其外出にも冗費無  
 き様、亦主人の子等が藩儒早川某の許への通學に附添ふ  
 て、其れを待つ間の窓の下、洩れ聞こゆる讀書の聲を胸  
 に疊むて其身の修養とする、實に斯くまでに油断が無か  
 った。

誠實以て碎身盡す金次郎の督勵鞭達、夜々は亦一同を  
 一間に集めて處世の仕法、勤儉推讓、報徳の道を説き示  
 しつ、此れに加へる讀書に得た興味深い譚りなどして面  
 白ふ聞かせるに、皆夜るの其れを樂しみに晝の働きも心  
 軽く、一同先生々と慕ひ、金次郎は亦同じ雇ひの心を  
 以て些の誇氣もなく。  
 一度死地に入つた服部家は、一年二年と息吹返して、  
 茲に期せしより早く、金次郎の功に全く家計は復活した。  
 千三百兩の大債は、一家が四年の奮勵に悉く償却して、  
 猶帳簿に餘る三百金、金次郎は主人夫婦の前へ、帳簿に  
 添へて差出したのである。  
 さて改めて主人に對ひ。



「先づ如何やら御命を果しました、と申すも貴方様御二人が私等申す言克く御聞き納め下され御辛抱なされた事と、一ツには女小者迄が御家の事思ふ一心に克く指揮を守り呉れましたればこそ、即ち功は御一家の功、手柄と云へば皆が手柄でムりまする、兎まれ此四年の慣ひお続けなされば未々御家の榮申す迄もムりませぬ、お芽出度い事、さて此金子三百兩半金は御前御手許へ何かの御用意、亦残りはお奥様が長の御慰勞お思召に任せます、何卒向後共疎かならぬ様……。」

何處迄も心着ける厚き言葉に十郎兵衛は、轉た四年前の事も想ひ合せて何とも云へぬ感じは、管眼に潤ひ涙

「金次郎殿お力なればこそ、想へば夢の様……そなた克

く御禮申さうぞ。」

妻願みて云へば。

「はい何と御禮申さう言葉さへ出ませぬ。」

と共に感謝の涙拭ふのである。

(三十四) 四年前の短羽織

聽て十郎兵衛は其金子の内百兩を差出しつ金次郎に對

ひ。

「御意に背くかも存せぬ、長々の御骨折に何と報ひ様もムらぬ、先づ取敢へず心ばかり、此内百金だけ御納め置

を願ひたい。」

「いや、さや。」



金次郎は頭を振つて。

「其御志は嬉しう受けまする、然し金子頂さまするは私意でござりませぬ、御家の爲想ふて勤めた心が合点致しませぬ。」

「其言葉一言返す様もない、さりとして此儘では吾等の心が濟まぬ、曲げて御受け下さらぬか、たつて願ふ。」

「されば、御志は受けますると申すに。」

「さ、此金子ちやて御禮としては申されぬ、真心ばかり。」

「さまで仰せある。」

金次郎は何か思案して

「折角の事、難有く御受け致します。」

「お納め下さる、いや其れて吾等の心も濟む。」

「就て私、御家の事濟みましたれば、茲にお暇願ひまする。」

「さりとは急な、未だ、當分は御滞まりなされて、向後は些打寛げてな……。」

「御言葉忝け無き事に存じますれ、長の留守田畑の事も想はれまする、久しく手にせぬ鋤鋤も懐しふりまする。」

「む、何處迄か美しい事、無理を乞ふて年月の御苦勞かけ、其上未練にお止めするも心無い……。」

十郎兵衛の云へば、妻も慕はし氣に。

「真にお名残惜しう存じまする。」

金次郎は打笑ふて。

「遠い所へ歸りますでもない、折節御訪ね仕る事。」



無一文  
應て其金子を受け、其間を下り、亦一間に婢僕一同集めて、四年の馴染を茲に暇の詞、而して皆が克く出精しての四年の働き其勤勞に報ゆるとて、今主人より受けし百金を餘すなく分與へて、身は四年前の短か羽織小倉の帯して飄然と栢山へ歸る。

(三十五) 無一文

縁て五年目の二月、瀬戸の梅の木笑顔に待つ頃。

『さ、立派に事仕負せて歸つたぞ。』

家に入るや斯く云ふ其聲は何時に變らず大きく高い。

『ま、まア。』

妻は何やら濡手拭きつゝ出て迎へて、長かりし〜足

掛五年、戀しふ待つた夫の顔、先づ何よりも嬉しい涙がほろ〜と出る。

『友吉は農事に行てか。』

『はい。』

『家に變る事もない、汝も壯健、可し〜……したがきの道が家へ戻るとがつかりする。』

『さぞ、さぞまア御骨折の事、友吉殿とも申し暮らしました、然し何でムいまして、あの……。』

妻は云ひかけて泣むだが、胸ときめかせつ。

『御禮やら何や彼や、定めし其効は大い事でムりまして、』

と、後から物運ぶ人の來様か、懐ろから黄金の包も出様かと待てば、何事、夫は苦い顔して。



無一文  
「其効は立派に服部殿お邸を安泰にしたのぢや、禮……」  
何を云ふ、莫迦な事訊くな。」

忽ち機嫌は變つたのである。  
妻女きのは凡の女であつた。

五年の勤勞何物も得て立戻つた、美しき夫の心を解す  
力がなかつた。

五年振の顔見た嬉し涙は、其樂しむだ土産の無いに失  
望して、唯夫が甲斐性なくのみ見へて來て、口惜し涙と  
變つたのである。

「貴郎。」

「ひ。」

「何と云ふお思召てムります。」

「何が。」

「五年のお勤め、何の骨打効もないぢやムりませぬか。」  
「未だ莫迦な解らぬ言云ふ、服部殿の御家危かつたゑら  
い借金残らず濟ませて、此後の仕法立てゝ來た、御夫婦  
は涙を流して欣ばれたわ。」

「其れや服部様が御家は然様でムりますれ、貴郎の御身は  
どうでムります。」

「俺が身は這麼譽れはない。」

「ぢやとて貴郎お身に何一ツ着けて御歸りなされず……。」

金次郎は暫く黙して、ほつと太息した。

「無一文で戻つたを、甲斐性無い男と云ふのか。」



無一文  
窓らう張合ももう無い。

「きの不足かな。」

「はい、貴郎あんまりちやムりませぬか。」

と息巻いて答へる、金次郎は苦笑しつ。

「ちやが禮金百兩貰ふたわ。」

「あの百兩。」

妻は思はず聲はづませる。

「然し皆家の者に呉れて来た。」

「……………」

妻は呆氣にとられた。

「貴郎ッ。」

「噴さいな。」

「五年留守する女房の氣も察しありませぬか。」

と云ふ膝にはらくと涙が降る。

金次郎の眼は光つた。

「きのッ、俺や金儲けに行つたのぢやない。」

其聲は鋭かつた

(三十六)

妻女離縁

きのふ迄千石の家に己が儘采配振つて、先生を以て呼ばれた身も、戻れば鋤鍬泥草鞋、栢山村の百姓金次郎、其處をこそ凡ならぬ人と見様を、肥桶擔ぐ後ろつき、淺薄な妻はさてもつまらなき人よと、嘗て想ひし望は絶へて頼り甲斐無い。



亦金次郎は、休日と云へば村の若者子供等集めて殿様講と此れを名稱け、學びの道處世の法、報徳の心の養ひ面白講義する、家や狭しと集ふ人に身の代減らして茶飯の振舞ひ、妻は此れも氣に入らぬ、帯一筋買ふて呉れ様ともせずと、さのは愚痴の絶へぬのであつた。

笑ふて居れば怨み、強く云はば泣く、女心の曲りては、説いて解せず、遂に一日きのは自ら離縁の事申出でた。

『私お暇頂きたう存じまする。』

『左様か。』

金次郎は咎めず。

想ふ様、淺薄な者娶つたは一生の不作、此れには却々仕法分度もむづかしと、其儘諦らめて居たを、妻よりの

申出て、去らば猶不憚な者と爲様なれ、乞ふものを我慢して否む程の者ならねば言ふまゝに

『苦勞懸けたの。』

と一言、立派に離縁したのである。

元來金次郎は晩婚論者であつたものを、人々の強ての薦めに妻帯せしなれ、且事に熱する身の去りて何淋しふもない、然も年齢未だ三十を越さぬのである。

渠は唯村の爲人の爲に致々として盡して居る。

服部家の整理に功成せしより其名は彌々高く、其徳を慕ふ者、其智を借る者、村に事あらば人々の一々二宮の門訪はねば事済まぬ程であつた。

時に舎弟友吉は同村常右衛門が方に養子となつて三郎



左衛門と改め、此れは芽出度く家を離れた。

(三十七)

量器改正

改元ありて文政元年、霜月某の日領主大久保加賀守お  
思召深く、領内の百姓出精の者孝人奇特の者を集められ  
て、親しく褒詞を賜はる。

酒匂川の水静かに晴れくと富士見る岸の廣場に殿様  
御席は設けられて御役向きの人々を左右にひかへ、遙か  
下りて居並ぶ村々の者五六十、皆限り無き身の幸と感涙  
に平伏する。

其褒詞賜ふ者一人にまれ出せし村々の譽れ、中にも柏  
山村金次郎は一際譽れの者であつた。

此事ありて其名は彌々高く、天晴れの人よ智者よ學者  
よと、雜草の中の本松、村一番否郡に一人、旋ては國  
に一人の男よと人々の推賞惜かず、さりさて金次郎は其  
聲何とも聞かず、嘗てキ印金次と呼ばれし時願みぬと等  
しく、管己れの精一抔公益を計つて、世に人に盡す例の  
如く、餘事には決して其眼も耳も走らぬのである。

星霜幾つか過ぎた。

金次郎三十四才、其花の春縁ありて飯泉村岡田彌吉の  
女波子を後妻とし迎へた、波子芳紀正に十六才、幼少よ  
り小田原城内に奉公して、女一通りの心得確かに氣質秀  
れたる者、金次郎とは數して倍の年齢下なれど、金次郎  
波子の人爲を克く知り、波子は元來噂に高き金次郎を慕



百姓でゐる  
 ひ、結むでは彌々堅忍貞淑、此人にして此妻こそ得たる  
 かな。  
 其妻得し年の末、小川原藩領に量器改正の事あり、其  
 調査方金次郎の命せられる處となつて、茲に熱心立案し  
 て新榊の調製、亦美事功を奏し、賞として一年の租を免  
 除せられるに至つた。  
 越へて翌年一子を擧げ彌太郎と名命け重ねての芽出度  
 さ、折柄又金次郎の身に上無き事は來た。  
 此れこそ尊徳先生一代晴れの舞臺、即ち野州櫻町の開  
 墾其れである。

(三十八)

百姓でゐる

二宮尊徳

茲に小田原侯分家、字津家の采邑四千石、下野芳賀郡  
 櫻町とて、物井横田東沼の三ヶ村に成る所、此地土質の  
 難か五穀實らず、風習の厄か邑民何れも無頼遊惰に流れ  
 其土地と其民とは、管座して争ふに慣れ、田野は荒れる  
 に任せ、民家は旋てに狐狸の住居とやなるべく、古き元  
 祿の頃四百三十餘と聞こへし戸數も進むべき世に退きて  
 僅かに此時百三十と減じ、小田原侯の憂ひ給ふ久しく、  
 幾度か家臣を派し數千金を下して此れが興復を企るも、  
 一度遊惰に流れたる無頼の民は、徒らに其費をのみ得ん  
 に勤めて奸策佞計到らざる無く、荒地は其儘、村は酒と  
 なり謳となり盡きては再び争ひの村となるのであつた。  
 時に小田原侯賢明、此地の改革を任ずる者彼れ栢山の



男、二宮金次郎を以てする事必らず功績を見るべしと思召された。

内意を聞き及び其友鶴澤は君命の大と彼れが身の晴れを、我が事の如く欣び來つて告げた。

此時金次郎は既に名主格三人扶持を賜はつて居た、然し此事及びも無しと、如何に命なればとて、爲し得ざる事と首打振つた。

改めて小田原侯は重臣石井賢太夫を以て差向けた、供を門邊に物殿か、二宮が一間に賢太夫は君公の命傳へて袴の膝正しく金次郎の答へを待つのである。

其大命、御見出しに預る果報、例へん物もムりませぬ、然し堤の破れ繕へよの御命こそ私力一杯、何として其大

命、恐れながら御断り申上げまする。』  
「何、お受なさらぬ、』  
「は5。』  
「家臣皆爲能はざるの事、御意深き御命、其許の御出世も想はるゝに。』

「御家臣さへ能はざるの事、私は百姓でムります。』  
「言はれな、御領主の御意。』  
「何にせよ。』  
「どうでも。』  
「諄ふ申上るが、私百姓でムります、』

(三十九) 御召の御沙汰



幾度か使者は来た、幾度か重臣が方に招ばれた、然し意に納まらぬ限り、權威の下に何物もなく徒らに服す金次郎で無い。

實に其間三年に涉つたのであるが、小田原侯は猶懸命を下して止まぬのであつた、其君の御仁心、事に對して納めん、斯く迄の御熱意、遂に金次郎は君が其強き御心一ツに想ひ決して、御受け申上げた。

然し興復の事容易でない、先づ一に其地の民情を視察しての上、若し効無からんと見れば全く御除命給はれ度くと願ひ出で、其御答へを得て、茲に野州櫻町に赴く事となつたのである。

到りて見れば、聞くよりも猶邑民の無頼怠惰は極まつ

て居た、其土地は想ふより猶瘦さらばへて居た。

金次郎は陣屋に入り日を重かねて、三邑隈無へ踏査し其情況と地の理を究め、興復の策を考じ、陣屋の机に幾夜の筆、其視察の趣きと仕法の案刺す無く認めて立戻り直ちに重臣を経て、其精密なる復命書は小田原侯御手に許に開られたのである。

旋て金次郎御召の御沙汰。

榮へあるかな一笠の農夫金次郎は城中に罷り、時の天下の執權とし俊才と聞こへた小田原十二萬石の主、大久保加賀守忠真朝臣の御膝近く、恐悦申上る。

「強いてももの申附け、太儀の事の。」  
斯く厚き御言葉は出た。



お召の御沙汰

「書の面、法立たば効有るげに見る、満足ぞや、猶能く聞かうぞ。」

「法立てば効有之れ、私共法立て、御見出し給はる程の力とてもなさ者、如何ムりませうや、唯誠を以て命の限り御奉公仕りまする。」

「あ、善き言云ふ、仕法用度何金なりとも遣はさうぞ。」  
忠真公の御意、金次郎は憚りなく。

「いや。」

と其聲は例の高く、宏々たる座に響く。

「用度御無用にムります。」

「はての。」

忠真公は面白しと頬笑み給ふ、肱掛を御脇に。

御庭の泉水の邊り、鶴の歩む。

(四十) 滔々數千言

「恐れながら、汗が作らぬ黄金は惰弱の民を猶惰弱に仕りまする、黄金もて作る田は誠の精に育ちませぬ、私仕法は誠を以て本と立てまする、君若し黄金下し給はば、彼の民は管其黄金をのみ望み、歛を擱まんより策を構へて、人は人を謀るを以て手柄とし、座して利せんに勤めまする、荒蕪の地を興さんは荒蕪の力を以てする即ち誠の力、仕法の一は其れ、誠を以て人の誠を起させまする、金に依つて動くは金に依つて動くてムります、誠に依つて動くは即ち誠、憚りながら日本開けまして今日ある幾

二宮孫徳



億万の開田は、金に依つて開きましたたてはムりませぬ、  
 先づ荒蕪の地一段を開き、産米一石得たと致しまするに  
 其五斗を以て食とし残る五斗を以て開田料と致します、  
 年々斯の如くにして行ひますれば他の材を用ひずして成  
 る事と存じまする、唯美事法立てます迄の民の心の荒  
 蕪を開らさまする事の却々難義、亦御分家四千石の御知  
 行とムりますれ、開田の事成りましたも何分彼の地質の  
 瘦は、眞の收穫其御知行過半にも到らぬでムりまする、  
 嘗て彼の瘦地を肥地と同じく検竿細尺に當てられし事は、  
 一段の田に二段の年貢を御取立の事と知らず相成居りま  
 する、邑民の心の荒蕪を開き開墾の事全く爲りましても  
 即ち御分家御領は四千石の過半にムりまする、勞して後

\* \* \* \* \*  
 『は。』  
 『行きて其實を擧げよ。』  
 \* \* \* \* \*

再び不足の御知行、猶民の補ふ處と相成るに於ては又瘵  
 滅の時の來たる事と存じまする、憚りながら斯かる地に  
 御心煩はせ給ふより、四千石全き土地御分けの事こそ、  
 御分家の爲望ましふ存じまする。』  
 憶せず金次郎は想ふ限り、滔々として其大聲に述立る。  
 忠眞公は一々領かせ給ひ。  
 『能ふ解る、ちやがの、名實調はぬ地とて實二千石の領、  
 瘵衰に到らせる事本意で無い、其方仕法に委任する、言  
 ふ迄もない國家の爲ちや、成りての後の不足宇津への補  
 ひはする。』



(四十一)

眼

乞

金次郎彌々茲に御受して、一代の花や櫻町に事成さん  
 決心固く、小田原を出て七ツ下り、戻るさを善榮寺の父  
 母が墓所に立寄り、四邊清めて手向けの水。  
 『御兩親様、村の事や何や彼や殊に此頃御領主様御命に  
 野州へ檢分に参りなど致し、久しふ御無沙汰に相成まし  
 た、就ては亦今度愈々檢分の事濟み改めて彼の地へ赴任  
 致す事に相成ました、が、さて御兩親様、此役目世の並々  
 の事でムりませぬ、御領主様御重臣が幾度か御命受けて  
 御出張なされるも皆事ならず、果を私御見出しに預つて仰  
 せつけられました、身の面目此上も無き事でムります、れ

功成ります、却々容易なりませぬ、十年、廿年、或は  
 私一生の御奉公にもなりませうか、其覺悟でムります、  
 然らば再び故郷の土踏めませうや否、野州の土となりま  
 せうも知れませぬ、どうやら御跡を襲ぎ栢山村代々の農  
 今は妻悴と皆恙なく、楽しい日を得て、朝夕の膳部さへ阿  
 父様昔時御座りなされた邊りは私の座、阿母様御出の方  
 へ妻、私の座りなされた處に彌太郎奴座らせませぬ、亦友  
 吉は常右衛門が方に精出して居ります、御墓所は近し  
 慕はしき栢山の土、思切りて去ります事、孝に背き、  
 分を忘れた事にムりませうが、身分も無く亦何功もなき  
 者へさまでに御領主様の仰せ附け、何事を捨ててもせねば  
 ならぬが世の法と存じます、決して徒らの譽れに



憧 憬 する 國 家 の 爲 と 爲 せ ぬ、 尊 君 命、 亦 廢 衰 の 地 を 起 し 立  
 歸 り ま し て 妻 悴 の 存 意 に 依 つ て は、 共 に 彼 の 地 へ 立 越 へ  
 ま す る か、 亦 一 度 實 家 方 へ 預 け ま す る か、 ど ち ら に も 致  
 せ 代 々 の 家 茲 に 又 一 度 閉 し ま す る 事、 其 れ と 共 功 成 ま す  
 曉 ま だ て は 御 墓 所 の 土 を 踏 む 事 も な り ま せ ぬ、 何 卒 御 許 し  
 下 さ る 様、 只 今 御 命 受 け て の 戻 り、 御 暇 乞 に 立 寄 り ま し  
 た。

言 ひ 終 り て 眼 を 閉 じ、 此 れ が 此 墓 所 に 座 り 納 め か、 心  
 静 め て 讀 出 す 名 殘 り の 經 一 卷

(四十二)

出

立

金 次 郎 は 立 戻 り て 妻 に 對 ひ。

「波、 今日 は 愈 々 赴 任 の 事 仰 せ 附 け ら れ た、 日 を 過 さ ず  
 出 立 の 心、 普 通 な ら ぬ 役 目、 年 限 の 程 も 解 ら ぬ、 汝 ぞ う  
 する。」

其 問 ひ は 強 い。

「お 芽 度 た き 事 に 存 じ ま す る、 私 は 御 許 し 下 さ る 限 り、  
 彌 太 郎 と 共 伴 ひ を 願 ひ ま す る、 御 役 目 の 御 手 助 け な り  
 ま せ ぬ ま で も、 私 だ け の 事 致 し ま す る。」

さ り、 と 答 へ て 妻 は 膝 なる 彌 太 郎 の 天 窓 を 撫 て つ。

「阿 父 様 の 容 易 な ら ぬ 御 事 業、 其 内 お 前 大 き ぶ な つ て お  
 手 助 け し や う ぞ。」

と 云 へ ば、 何 解 ら ぬ と 彌 太 郎 打 笑 ふ て 合 点 す る。



出立

金次郎は猶言葉強く。

「彌太郎負ふて共に行くか、よいか一生の難事ぢやが。」

「覺悟でムりまする。」

「利慾の事でない。」

「幾程私女ぢやとて、其麼氣ぢやムりませぬ。」

「諾し。」

「お伴ひ下さりまするか。」

「行かいてか。」

「はい、嬉しふ存じます。」

「難儀ぢやろが、世の爲ぢや。」

「何が難儀、貴郎と共に致しまする。」

妻の頬は活々とした紅の色。

茲に金次郎はあらゆる難に作り得た田畑第三郎左衛門に末練無く與へて、家財諸道具は賣拂ふて用意の代とし、親子三人の身は軽く、役目は重き任地へ向け、今日こそ出立の日となつた。暇乞とて寄集ふ村人、親戚、朋友の城下迄も送らばやと云ふを強て断り、名残りは盡さぬ道の地藏も古馴染、波子は彌太郎を負ひ、金次郎は菅の笠を手に、振返へる丸木橋の半途。

「大切にさつしやれや。」

と手を舉げて人々は呼ぶ。

「はい御機嫌宜く。」

二宮尊徳



出迎の一酌  
金次郎の聲高、波子は道が女の心強くも知らず潤む涙。  
荷物を肩に弟三郎左衛門、一人小田原越へて國府津の  
邊りまで着させ従ふた。

(四十三) 出迎の一酌

二宮夫婦は交代に彌太郎を負ひ、荷を肩げ東海道を江  
戸に下り、漸く櫻町に程近き、野州谷田貝驛と云へるに  
着いた。

時文政六年三月下旬。

折柄驛はづれの茶店に袴着けたる人二三、其れと見て  
馳寄り。

「此れは二宮先生にムりまするか。」

「小田原殿様の御委任に櫻町へ遙々との御越。」  
「萬御手配下さるとの事、村民一同の悦び、何に例へん  
様もムりませぬ。」

「今日は御歸着か、いや翌日こそはと御待申した事でム  
りまする。」

「長途の旅、殊に奥様お坊様のさぞ、ホンの御勞れ休め  
と此邊りの茶亭に御息つぎの一酌用意致しました。」

「村の心ばかり、御笑ひ下されて。」

「何とて碌な物もムりませぬが、御出迎ひ旁々、御足休  
めまで、未だ日も高うムりまする陣屋お着きは御寛りで

大事ムりませぬ。」  
「先づ何卒。」